

三番 右左近番長敦時、依仰誠、新宰相中將并宗忠經頭、經頭、
 四番 右左近舍人敦貞、將中、
 五番 右左近舍人國重、中納言、
 馬院御馬殿下御馬也、移平文、殿下移也、中納言荒染院下給、

上社ノ儀
競馬

女房殿上
答人和歌贈上

日入之後發亂聲、舞祓頭、童八人、皆八、
 頭辨之兒竝兵衛佐爲遠纏頭、此間公卿退歸、又四位少將顯雅朝臣還、秉燭之
 後參入上御社、御幣付社司了、後有競馬、立明之前只鼓聲、不見勝負、但召信貞、
 經頭兼重、忠助、各一人、敦貞、一人、祓頭童、二人、是院御隨身中納言隨身爲響應
 也、事了還之次、殿上人等引向參中納言中將御所、土御門也、中納言殿令逢給、依施
 方之面目、爲慶賀所參仕也、有暫退出、各々分散、女房令還本院了、
 乘尻等院御隨身也、皆左近也、右近一人不被入、但中納言殿爲右中將、依左
 方念人、彼隨身許所被入也、凡今度事依率爾、乘尻等或他行、或服藥者、又於
 下御社、自女房以薄樣作標書和歌被送殿上人之中、其詞云、
 ユフタスキシメヒキカケテイノレハソカミモカタヒクコ、ロツキケル
 返事懷紙返送右大辨、

アヤメ草ヒキマサリニシナコリヲハカミモウレシトヲモハサラメヤ
 又於上御社、女房送和歌於少將、忠、云、
 タチナラフヒトヤアラマシチハヤフル我カタヲカノカミナカリセハ
 返歌云、
 ミソキシテイノリシコトノカヒアレハ我カタヲカノ神ソウレシキ

舍人十裝束、方女房殿上人、或二具、或一具、
 居飼、攝津守重資、勤之、
 後聞、右方文臺沈几帳、手足直居、皆銀、掘物、瑠璃帷、三、

色々綾羅之類、竝銀色紙形書和歌懸角一、納菖蒲根一筋、銀根藥
 玉等懸几帳手、丹波守季房所役、
 童二人裝束、錦袖、浮線綾、三重、祈衫、年銀花、作、
 女房檜破子一雙、

已上近江守爲家儲之、(也カ)
 女房扇殿上人有菖蒲劔之、
 〔元亨二年具注曆裏書〕(江記)四月九日、乙卯、○入夜能登守俊兼來、略、○中又語曰、近

左ノ右ノ侍相
論アリニ相
爲實ナリ所
司職ナリ止

來院和歌合事猶未休挑心左方侍爲實與右方侍長修理亮之相論因茲右府
被止爲實所司職云々

〔今鏡〕

七ねあはせ 村上の源氏

女宮は媢子の内親王と申すは白河院の第一の

御むすめ略○中院號ありて郁芳門院と申き寛治七年五月五日あやめの根
合せさせ給ひて歌合の題喜蒲郭公五月雨祝戀なん侍りけるこまかには
歌合の日記などに侍るらん判者は六條のおほい殿（編原）させ給へり周防内
侍戀の歌

判者周防
内侍ノ歌
ヲ推賞ス

こひわひてなかむるそらのうき雲や我が下もえの煙なるらん

とよめりけるを判者あはれつかうまつりたる歌かなと侍りければ右歌
人かちぬとてこのうた詠してたち（藤原）にけるとなん二位大納言の宰相にお
はせしにかはりて孝善（藤原）かひくてもたゆくなかき根のとよめとよめ侍る
そかし

孝善經實
ニ代リテ
和歌ヲ詠
ズ

〔袋草紙〕

二 歌合事雜談

郁芳門院根合時江記云右中辨師頼曰尾張守許孝善（藤原忠教）

來向所國基住吉神社入孝善歌之由申請所入云々彼時左右相挑之間爲嗽々匡房卿
云右大辨通俊歌至予者不可被挑先年書狀今猶有之其書云和歌之道雖能

通俊自ラ
和歌ニ於
テハ匡房
トナズ

宣忠峯不可恐之於貴殿者深所恐申也者件書狀爲明鏡何可忌彼書哉俊兼
聞之大咲云件歌合左方人以中納言中將今入道爲言口无心云々隨殿下頻
令制止給少年之人不知和歌案内何爲殿上人々言口哉就中累葉風无此例
云々已上見江記

〔袋草紙遺編〕

一 和歌合次第内裏

兼日定和歌題并左右頭念人等略○中郁芳門院根合時左右頭女房也略○中

根合次第

次左右各定雜事有定
定文書様

雜事行事

歌合右方雜事

- 一 奉幣
- 一 被事其所行
- 一 文臺
- 一 籌刺
- 一 燈臺

寛治七年五月五日

一饗

一女房檜破子

一裝束

年月日

各有行事時、郁芳門院根合、江記說也。

次祈禱奉幣略、中

郁芳門院根合野、石清水、賀茂、稻荷、住吉、北、云、是右方也。○中略

次御裝束略、中

郁芳門院根合御所六條、院、江記云、

寢殿南廂也、垂母屋六間、并左右庇御簾、爲御所并女房所候、中央間二間、東者郁芳門院御所、西者一院御所也、其中立御屏風、關白候簾中給、其左右各三間女房所候也、南庇左右妻各三間敷高麗端帖三枚、中央間二間左右各敷圓座一枚、爲講師座、南簀子敷左右各第二三間敷紫端帖二枚、爲右方殿上人座云云、次左右方人參入集會所、承曆時左方弘徽殿、右方下侍、郁芳門院根合左東殿寢殿、右同御湯殿、自餘不分明、

御所裝束

祈禱奉幣

出御ノ剋

文臺ヲ立
ツル所役
員刺ヲ置
カズ

文臺ヲ立
ツル順序

燈臺ヲ供

參入音聲
ニ席田ヲ
歌フ
披講ニ通
俊匡房卿
者ノ後ニ
參候ス

次剋限宸儀出御略、中郁芳門院根合及申剋、始、根合、江記云、關白候簾中給、剋、

限出自御所御簾西妻初半出、候於簾下給、上皇又上御簾給高三尺、餘許、云、○中略

次立左文臺略、中郁芳門院根合、左五位六位、右童女二人略、中

次置員刺具、昇人如文臺、或時無此事略、中郁芳門根合時、依上皇仰無員刺云々、

次立右文臺并員刺具等、但天曆并承曆右方先立之、自餘左爲先、

郁芳門根合江記云、左方立文臺、登自東二棟廊前階、經寢殿東并南簀子、自南

面御座間立之於燈臺北先敷、打敷、右方五節儀也、其童宿裝束也、第一童持敷物、自

西并南簀子參入、登於御前間、敷圓座北、第二童持枕几帳一本、是爲文臺、乃置

於錦帖之上云々、

次隨召供燈臺、六位役之、隨便一兩所立之、講師前短燈各一本、根合時最先供

兩方燈臺云云、是依入夜始歟略、中

次奏參入音聲略、中根合時院、郁芳、左方乘船歌席田參上云云略、中

次臨披講期撰堪能者一兩可進參之、由仰之、根合時左通俊卿、右匡房卿、應召

候判者後長押上、殿上人長押下云云略、中

根合作法

勝方舞

後三條天皇御忌月
ニ依リテ
宿願ナシ

諸役

寬治七年五月五日

九二四

次講和歌○中永承六年根合土記云、左方經家進、居洲濱下取出根、良基進取藥玉、置御前長押上、以根曳展一丈一尺許、右資綱進取出根、基家受取置御前、如左方、根長一丈三尺許也。寬治根合作法又如此、○中略

次勝負舞、雖負員多、最後番勝者可奏勝方舞歟、根合江記云、右方人議云、第十番歌若勝者可奏勝方舞、是相撲時雖多負、最後番若勝者奏納蘇利之故也、右

中辨師賴、童時習此舞、適在此方、可用意云云。○中略

次御遊事○中根合時依一院御忌月、無御遊事云云。○中略

次有宿願事、後日果之。○中根合時左賀茂競馬、右八幡競馬云云。○中略

一歌合判者、講、讀師并題者、或撰者、清書人等、所不載之、但密儀并次

郁芳門院根合時、江記云、○本文略ス、前掲袋草紙ニ同シ

一古今歌合難、尋古跡

白河院皇女
郁芳門院根合、十番、寬治七年、左右持

判者 右大臣六條右府

講師 左四位侍從藤原宗綱朝臣、右右近少將源能俊朝臣、

讀師 左藤原季仲朝臣、右右中辨源師賴朝臣、

題者 匡房卿

撰者 左右大辨通俊、右右大辨匡房、

清書 源大納言雅實書左右歌、

江記云、源大納言雅實書兩方歌、左方愁之、天德詩合時、道風書兩方詩、強不可為愁事也云々、

左以沉作鏡篋、以懸枕、為和歌斷紙、續色々紙、以水精為藉軸、一卷書五首、右以枕几帳一本、為文臺、銀手歌云、居其帳、白浮泉綾、其上銀銅薄色紙形染之、書和歌云云、

一撰者故實 雖非秀逸、可然云公達并重代者歌必可入之、又雖重代後生未詠晴歌、可有議之由、匡房卿所示也、但不秀逸之時事也、於秀歌者不可依人、

寬治根合、右撰者匡房卿也、伴記云、大理俊實歌中五月雨歌頗宜、唯水狎棹水益等若為病歟、仍不入之、戶部經信邊歌須一首必入也、然而於不快也、仍不入之、

故伯母歌一首必可入之、是賴基、能宣、輔親、伊勢大輔、伯母、安藝君六代相傳之歌人、兼候新院、爭無用意哉、然而無宜歌、仍祝歌可收拾之由、度々示之、賴綱朝臣好此道經年之者也、其智、能俊朝臣歌須入一首、而無宜歌、又讀左方歌之

寬治七年五月五日

九二五

鏡篋ニ和
納ム紙ヲ

撰者故實

寛治七年五月五日

九二六

判者故實

由有風聞、仍不入之、抑女房歌中淺沼(鹿力)人々云、太仍除之、伴沼在陸奥、京都所爲一月餘路也、不可逢今日事、所引之菖蒲定黃(マ)損歎云云、大貳女房歌時鳥歌入之、爲譜代歌仙之故也、紫式部故大貳三位并伴女房也、亦云、左方不得等(マ)一、以孝善(青)門、歌立一番以成元盧橘之歌立二番、若非佳境者、如然輩歌不可必入之云云、略中

郁芳門院根合時、六條右府爲判者、一番左右歌講之後、左右方未申左右之間、判者被申云、可爲持依爲一番也、二番歌讀了、後日左右可申各瑕釁、其後左右相互致難後評定之、或時判者難之、又陳之常事也、略中

郁芳門院根合者六條右府

二番(昌)昌蒲

左持

藤孝善經實代

あやめ草引手もたゆく長き根のいかてあさかの沼に生けん

右

入道帥上

君か世のなかき例にひけとてや淀の菖蒲のねさしそめけん

判詞

左人云、あやめをはなにをよめるにか、古歌にはあやめくさこそよめ

国房判チ
難ス

れ、あやめは別物名なり、判者云、さうふをあやめといふ事けふはしめず、いはれぬことなり、但右歌はしたゝかにつかうまつれり、左歌はあさかのぬまによせて、根をはひくてもたゆくなかしとよみたる、ことたかひたる心ちすれとも、すかた歌めきて侍れは持と申、

江記云、右方人云、淺鹿沼間(マ)在陸奥、自京一月路也、不可逢今日事、所引之昌蒲黃損歎云云、永承四年殿上根合(昌)選歌無草字、而被撰入、况右大辨通俊已所撰之後拾遺入之、今所難先後不覺云云、

三番郭公

左勝

堀河殿

ふた聲となかきなかぬ時鳥さこそみしかき夏の夜ならめ

右

雅俊卿

なかすどて打もふされす時鳥聲待人もねかたかりけり

左はいとくをかし、右上下ことたかひたる心地して、またほととぎす

さかすどて負畢、

江記云、右方人云、於御前專不詠夜短詞、依濫於世之一首、鄙詞三所なとかさ

寛治七年五月五日

九二七

こそならめ等也、如此詞二所(左)於凡詠三所乎云々、

四番時鳥

左持

大貳

一聲をまたれくゝて郭公幾夜といふにこよひ鳴らん

右

匡房卿

夕つくひいれは小倉の山のはにをちかへり鳴ほとゝきす哉

左いたくふるめきたれと右いとくみゝとをし、かゝることはふるき

歌合にもよからぬことはとありければ、いつれもをとりまさらすなん、

六番五月雨

左持

孝善

五月雨のひましなければ袖たれて山田は水に任せてそみる

右

匡房卿

つねよりも晴せぬ比の五月雨は天の河原も水やますらん

袖たれてといへる、なにこゝもきこえず、天河原に大水出もあめした

ゝめにくゝや、

江記云、右方云、袖たれての儀頗不優、又有弃申之義、可謂禁偉(左)、又天河水や益れる、是後撰之歌なり、尤不可爲難云々、

九番戀

左持

顯季卿

さりともと思ふはかりや我戀の命をかくるたのみ成らん

右

小別當左兵衛 督俊實

思ひかねさてもやしはし慰むと只なをさりに頼めやはせぬ

左人云、右戀といふもしなし、いかゝ、右人云、天徳歌合朝忠歌に、人をも身

をもうらみさらましと有歌、世人の乗口名歌、かの時又勝となん被定け

ると也、左人云、承暦歌合時、左戀歌その詞なしとて負、即今日判者大いま

うちきみなんかの時も判給へると申は、大臣云、かのうたはわたつみの

はるかなるそこに海士人のいれるよしをのみいひて、思たのむといふ

事もなし、古歌にも詞にも戀ともなければ、その心あるはみな除(左)とか

にもせぬもの也、左右歌同程なれば持となん、

一故人和歌難 郁芳門院根合に、周防内侍歌に、わか下もえのけふりなる

周防内侍
ノ歌詞ニ
禁忌アリ

寛治七年五月五日

九三〇

らんとよめる、又人のもえんけふりの空にたなひく、有禁忌之由人申けり
と云云、作者の山かと思ふに、先女院崩御之後に、内侍は隠にしとそ、俊頼朝
臣書置る、然而江記云、人々遣慶賀之由於周防掌侍許如何、是十番歌宜之由
也云云、

同根合時、右一番歌に多津の居と詠○下文

〔八雲御抄〕

作法部 出題 題者儒者得之於儒者は高位大才人可出之、○中

略 郁芳門院根合等、惣其比大略匡房也、

判者

寛治郁芳門院根合、右大臣

撰者

歌合撰者は判者に繼では可撰事歟、能々可思慮、

郁芳門院根合、左通俊、右匡房

講師 物合講師 寛治郁芳門院根合、左侍從宗忠、右少將能俊

讀師 讀師作法 歌合讀師は、唯授講師也、風流などに書花たるなどを
取て、講師に令讀役也、或無讀師、或又有之、但○中 郁芳根合季仲、爲讀師、○中

讀師ノ位

凡皆例四品也、

作者一身
ヲ詠ズ

作者 略 ○上 其後多歌合一身詠兩方、長元三十講次歌合并郁芳根合有例、

清書

清書 寛治郁芳門根合、兩方大納言、雅實書之

〔和歌合略目錄〕

判者

白河院皇女
郁芳門院十番根合

菖蒲根ノ
長サ

寛治 同七年 六條右大臣

〔古事談〕

二 臣節 郁芳門院根合之時、右方有五丈之根云々、伴根備前國牟古
計ノ狹戸ニアル似菖蒲物ノ根云々、凡菖蒲根長不過丈也、前例最長根ハ杜
若根也云々、

〔歷代編年集成〕

十九 堀河院 五月五日、郁芳門院有根合事、

○夫木和歌抄、一代要記、皇代曆、皇年代略記、異事ナキヲ以テ略ス、藤原

孝善ノ事蹟、便宜左二合敘ス、左衛門尉從五下

〔倭歌作者部類〕

五 二 位 藤孝善長門守、貞孝男、後拾遺集、五、金葉集、二、

千載集、二、新古今集、一、

〔尊卑分脈〕

藤氏 魚名流

貞孝使、右衛門尉、宮内丞、長門守、

孝善母、

世系

藤原孝善
ノ事蹟

寛治七年五月五日

九三一

承暦二年
内歌台
作者

孝善
下良
運

孝善
下俊
編

孝善
下隆
經

須磨
二遊
ノ

寛治七年五月五日

九三二

〔金葉和歌集〕

夏歌

承暦二年内裏歌合に、郭公を、人にかはりてよめる、

藤原孝善

子規心も空にあくかれてよかれからなるみ山へのさど

〔後拾遺和歌集〕

春上

二月はかり、良暹法師のもとにありやとをとつれ

て侍ければ、人々くして花見になんいてぬとさよて、つねはいさなふ

ものをとおもひて、尋てつかはしける、藤原孝善

春かすみへたつる山の麓までおもひもしらすゆく心かな

〔後拾遺和歌集〕

雜四

良暹法師ものいひわたる人に、あひかたきよしを、

なけきわたり侍けるに、げふなんかの人にあひたるといひをこそ侍

ければ、つかはしける、藤原孝善

うれしさをけふはなに、かつむらんくち果にきとみえし袂を

〔千載和歌集〕

賀歌

俊綱朝臣さぬきの守にまかりける時、祝の心をよめ

藤原孝善

君が代にくらへていは、松山のまつのは数はすくなかりけり

〔後拾遺和歌集〕

冬六

としつなの朝臣の、さぬきにてあや川の千どりをよ

み侍けるによめる、

藤原孝善

きり晴ぬあやの河へになく千鳥聲にや夜の行かたをしる

〔後拾遺和歌集〕

雜四

住吉にまいりてかへりにけるに、隆經朝臣なには

といふ所に侍とさよて、まかりよりて、日比あそひてまかりのほりけ

るに、なこり戀しきよしいひおこせて侍ければ、道よりつかはしける、

藤原孝善

わかれ行舟はつなてにまかすれど心は君かかたにこそひけ

〔新古今和歌集〕

雜七

春すまのかたにまかりてよめる、

藤原孝善

すまの浦のなきたるあさはめもはるに霞にまかふ鰻の釣舟

六日、陣定ヲ行ヒ、宇佐宮命婦ノ問記、尾張火上姉子社ノ僵木ノ再起、

及ビ賀茂社託宣ノ事等ヲ議ス、尋テ、命婦ヲ覆問セシメ、僵木ニ就テ、軒

廊御トヲ行ハシム、

〔百練抄〕

堀河院

五月八日、諸卿定申尾張國火上社臥木起立事并賀茂社

託宣御馬飼事等、

寛治七年五月六日

九三三

寬治七年五月六日

九三四

江記曰神託事先例或用之賀茂御供是也或不用之伊勢友平被止神鏡事也

〔後二條師通記〕

五月二日戊寅下食時減門晴○中頭辨來下申文云左右相府等稱

故障所辭申也承了去年宇佐宮黃金實否爲尾張臥木起事諸道勘文等

裏書大略云臥木起立事去治曆四年土佐國有件事云々同前

三日己卯晴○中惟信來傳殿下仰事云○中陣定即可定申者也於公卿障者

更不々知云々頭書「仰外記令催上達部云々」

四日庚辰雨降早朝外記來云民部卿治部卿左衛門督右衛門督左兵衛督皇

太后宮權大夫可參仕之由所申也左右大辨稱所勞不參仕云々就中右大辨

勞先日言上殿令外記申殿下了仰事云大略六日可候之由候御氣色云々上

達部等逗留之由仰外記了六日巳午時許慥可參之由各可告者也

六日壬午下食時晴已刻參右仗座相具文召外記問公卿參否左兵衛督圓融

寺八講上卿也仍未參入右大辨足下所勞未決云々不參上達部參會民部

卿中宮大夫藤大納言家右衛門督左大辨被候予示民部卿云文書等且可被

下歟爲之如何民部卿答云如常召官人云々不候以隨身召文書如常予不見

上達部ヲ
催ス

賀茂上社
飼馬ヲ
飼フ

命婦下問
ノ宣ニ就
臥木ニ就
キテ御ト
ナ行ハシ

御卜不吉

少監物經元
トヲ行フ

下文書了予曰命婦問記并尾張國火上姉子社臥木忽生并諸道等相加此等
可被定申也令左大辨讀之此間皇太后宮權大夫參候此間頭辨來下申文仰
云賀茂上社司申云上社司不令事由令飼御馬也雖載定文各可定申也此之
次命婦可遣本所歟何樣可候民部卿申云隨申請社司何樣候覽付社司不可
知食治部卿大略如民部卿左大辨勅定申文返奏此間時範來傳仰云可令定
申歟可問人々申云右大辨候曰可被行也
七日癸未復晴申刻頭辨來云命婦有下問之宣旨臥木之條有御卜仰民部卿
可行之由示觸了召左少辨重資之處兼燭所參也

裏書命婦與安富可被覆問也

八日甲申晴有軒廊御占事尾張國火上姉子僵木忽起事召諸道勘文其後有

陣定承民部卿所被行也御卜趣不吉也見消息云々

〔江次第〕

軒廊御卜 依無中臣官人用他司官人例

寬治七年五月八日卜尾張臥木忽起臥

少監物經元

〔賀茂注進雜記〕

神領

或記云○中同七年五月八日賀茂託宣御馬飼事等

寬治七年五月六日

九三五

諸卿定申、江記云、神託事先例或用之、賀茂御供是也、或不用之者、伊勢友平被止神鏡事也云々、

○尾張僵木ノ復起スルコト、二月是月ノ條ニ、宇佐宮命婦覆問ヲ議スルコト、本月十八日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

火上姉子社

〔神名帳考證〕

尾張國愛知郡 延喜式九之十

東海道四 火上姉子神社 今在大高

村、去熱田社巽一里半、村人云、當村古ハ火高村ト云ヒタレト、火國帳、正二位火上姉子名神集説、大高庄大高村、舊愛智郡、今尾張守村楢寛平記、宮酢媛下世之後、建祠崇祭之、號氷上姉子天神、其祠有愛智郡氷上邑、以海部氏爲神主、海部尾張氏別姓也云々、按天孫本紀、饒速日尊十世孫、淡夜別大海部直祖云々、凡高座、八劔、日割、火上稱熱田四所別宮、延久元年記、合大宮、稱五所大神、好忠集、神祭る冬はなかなはになりけりあねこか閨歟、に榊をりしく、信友云、寛平縁記日本武尊ノ御歌ニ、阿由知何多比加彌阿彌古トアリ、其外此神ノ事アリ可見合、

十二日、子、相模貢馬、

〔後二條師通記〕

五月十二日、戊子、厭對、晴、相模守敏俊貢馬二疋、一疋鼠毛、一疋白濱、

十八日、申陣定ヲ行ヒ、宇佐宮命婦ノ覆問ノ事等ヲ議ス、尋テ、宣旨ヲ下シテ、命婦ヲ本宮ニ返遣セシメ、大宰府及ビ彌勒寺ヲシテ、同寺別當清圓等ヲ召進セシム、

〔後二條師通記〕

五月十一日、丁亥、七鳥、晴、召史惟宗政孝、申刻參入、命婦之可

覆問由被下宣旨了、及未無音如何、左少辨返事云、私怠之間自然遅々、命婦今日可參之由令申了、相待之間所不見候也、重相尋、明且可申者也、

十二日、戊子、厭對、晴、略○中、戊刻左少辨重資來、相加本文書於覆問文獻之、不令申不明云々、成貞申云、猶申請拷訊云々、公順之眷屬慥以不申者、

十三日、己丑、晴、左大辨來臨、令見問記文、大略先日所進上之間記同前云々、未刻許隨身告頭辨被過之由、只今可參之由所申也、相待之間、已及秉燭、頭辨來云、内依人々不候、自然遅々、相逢、問記先日所下給之與官問注同前就中、宇大夫時則見侍之由所申也、召伴人可被問歟、頭辨文書等被給了、命婦申云、自山崎往反之間、候事煩之由令申也、暫間可候者、可候大膳職、不然之者令申下向

命婦問記

命婦時則
申ノ訊問
申請ス

之由可奏其由退出了、

十六日壬辰、五幕、晴、宇佐宮黃金之事、秉燭之間頭辨來、予相逢、被下調度文書

山崎ニ於
ケル命婦
叫聲ノコ
トヲ問ハ
シム

之次、宇大夫時則可問子細、任文書可問之、此之次於山崎邊、命婦有叫聲之聞

可被問者也、即召左少辨重資、即參、被下文書之任調度文書可問時則云々、命

婦叫聲事可相尋也、問夜內可申左右、

十七日癸巳、忌、遠行、早且參高陽院、已刻歸宅、左少辨覆問記獻之、命婦叫聲所

露申也、重可尋之、頭辨只今可過、此間甚雨降、申刻許頭辨來、付文書令奏之、但

十八日甲午、天雲不定、頭辨來、昨日文書返給云、可定申也、午刻參內、上達部未

參間、候御前、次參殿御宿所、欲參左仗座之間、上達部候殿上座、最勝講前有可

定申之事、講以後可定申歟、前後有否如何、僧未參者、令申云、何等有哉、著陣座、

可下文書等歟、爲之如何、民部卿申云、何等有哉、左大辨被候、殘之人々未參以前、且

可被下給如常、此間頭辨來云、宇佐宮命婦於大膳職、所覆問之事、早以可定申

也、雖不載定文、先可定申也、命婦宿山崎之間、有叫聲之聞、被尋問之處、已以露

命婦覆問
事ヲ議ス

官使ヲ山
崎ニ遣ス

申、世間萬人觸入耳根、命婦申云、件叫聲之事實也、子細可被辨申、言詞不明之

由所申也、證人男三人從者女一人所承也、行事辨召放從者女問子細之處、叫

聲之事實候也、申旨慥不令申云々、於大膳職召問之處、託宣座下之由所申候

也、行事辨重資不得其心、件日可令申之、隱心所未申之、奇恠罔極、其外不申分

明、何樣可申、件沙汰之可定申、依黃金紛失之事、須被拷訊、令占二箇條事、可被

行之由所被仰下也、上達部等可被定申者也、人々申旨耳根不明、不注子細、次

任調度文書可定申也、諸國條々事、文書等不被下云々、隨形勢須被下、暫間置

座前、公卿等定申了、左大辨染筆注紙、子細見於定文、被書之間、○此間申刻

定文書了、令讀之後、取傳公卿等授於予、召頭辨付文書等令奏之、○下略、最勝

十九日乙未、五幕、天陰、欲參內之間、頭辨來、宇佐宮命婦問記等下給之次、見目

錄云、於山崎邊有叫聲聞、遣官使於山崎近邊、命婦申旨可相尋也、可問子細者

寬治七年五月十八日

九四〇

〔朱書〕左少辨持來字佐文書事 廿日丙申甚雨略 中 戌刻左少辨重資命婦問日記文所持來也、神人等意趣頗

奇怪思給也、其故者有欲當件事氣色云々、未得其心之故也、

廿一日丁亥〔朱書〕付文書權頭辨〔西書〕減門 復晴陰雨降略 中 黃昏之程頭辨來臨、宇佐命婦覆問記等附之、令

奏之、頭辨申云、召上官方之由、人々所被申也、件人雖爲喚之、稱不可參洛中、有
其聞云々、奇恠罔極、

廿二日戊戌晴略 中 戌刻頭辨來臨、宇佐文書被下給曰、宣旨仰云、命婦者可返

遣於本宮、可從恒例神事者、仰大宰府并彌勒寺別當清圓可召進官方、日數者

卅日之中、慥可召進〔朱書〕 著官使可遣之者也、證人等慥可候也、召行事辨重資、傳宣

旨所仰也、其次緣起可尋官底、奇恠不少、不便尤多、

〔朱書〕字佐訴男來門外事 裏書、已刻許門部成貞參門外、申訴訟、問子細之處、問命婦之間漏落候、由所

令申也、左大辨許差使一人、件事爲之如何、答云、左大辨答云、於官底沙汰之

之刻、可令申上云々、可有沙汰云々、成貞避去、

廿五日辛丑〔朱書〕 五暮晴、午刻參高陽院、頭辨同參略 中 其次宇佐宮黃金證人等又

重所被召加行事歟、辨下向攝津云々、便付頭辨任先例可被行之由、所傳仰於

大夫史祐俊宿禰者、殿下仰云、奏者隨便宜可侍者也、

彌勒寺別當清圓ヲ召進セシム

宇佐黃金證人等ヲ召ス

證人等到著ス

證人等ノ文書ヲ奏ス

法家ニ罪名ヲ勘申セシム

八月十日乙卯、凶會、天陰略 中

裏略 中 左少辨重資參壁下座後云、宇佐宮令召進之證人等申參入之由、并

有申文、問戶部、付件辨奏事由、明日仰令獻之由了、

十四日己未、陰雨時々降、辰刻重資來云、宇佐宮證人等參仕、

十六日辛酉〔朱書〕 凶會、陰、時々雨降、頭辨來宣旨被拷訊之由、仰下了、即下了、其次宇

佐宮證人等文書付頭辨令奏云々、晚頭被下了、對問彼此宜經言上云々、殿下

雖固御物忌、戶部治部卿、右大辨、左大辨被候〔西書〕 下略、興福寺衆徒ノ蜂起スル

條ニ 收ム、

十七日壬戌、陰、左少辨來、證人等文書下給了、可被對問彼此、酉刻許、頭辨拷訊

日記持來、令奏事由、先是內覽如恒、子尅甚雨降、

十九日甲子、天陰、檢非違使重日記、已剋許被下給、仰云、陣定可候之由、被仰下

了、召外記、令催諸卿、返事未聞云々、未刻參內、召外記問參否、未申返事、右大辨

申參由、頭辨來、右大辨稱所勞由不參、似左道云々、異外也、

廿日乙丑、復、天陰、夜前所定申之調度文書等被下了、仰云、被下法家、可令勘申

罪過者、即被下了、可令傳法家之、明日已刻以前、宜令進者也、又仰如此云々、〔朱書〕 罪名仰了

寬治七年五月十八日

九四一

略、興福寺衆徒ノ蜂起
スルコトニカ、ル

廿一日、丙寅、天晴、未令進法家勘文云々、相尋頭辨之處、今日之内稱無術由、所不進也、

廿二日、丁卯、(未書「定事」)天晴、法家勘文卯時奉之、依爲直衣令傳奉云々、頭辨申云、召遣

國任ノ勘
狀ヲ範政
ニ見セシ

檢非違使範政、令見國任勘狀、未參之間、外記暫候、範政良久所參也、稱所勞由之故也、仰外記令催諸卿之由所告也、頭辨參院之間、不相待而參内、左大臣、戶部、中宮大夫、權大納言、治部卿、左衛門督、二位中將、左大辨、皇太后宮權大夫、被候、頭辨來云、彼文書等云、任勘狀仰可定申之由、避座人々未參前、可令獻文書、左大臣示可受之由、即獻之、次第一々被下之、良久申刻、右大辨參候、令讀文書了、

勘狀ニ就
テ議定ス

裏、宣旨之所讀了、右大辨申云、自與罪名不可讀候歟、問戶部、本體皆實可讀

上也、右大辨申云、端者大略載調度文書、頃之自與條可讀云々、讀了一々定

申上了、左大辨執筆、書了執筆令讀上之處、右衛門督、別當參入之由、左大辨

所申也、令著座可令定申歟爲之如何、左大辨書訖、戶部猶著座令申之、追被

加書如常、人々著座同前云々、子細見定文、召頭辨附文書等奏之、頭辨來云、

仰云、人々暫可候之由、所被仰下也、予承之人々告之云々、已及黃昏、頭辨來

云、諸卿可出之由、所被仰也、上達部各以分散、予罷出之間、殿下有御出之、付

藏人永實、被退出由、早可出之由、所被仰也、仍所罷出也、

廿三日、戊辰、(未)早旦雨降、戶部頭辨等候殿御前云々、

廿四日、己巳、雨降、頭辨往反、

廿五日、庚子、(午)九坎、早旦雨脚宜、已刻天晴、(中)

裏、宇佐宮大宰府召進證人々了、問日記調度文書等、相加彼此、左少辨獻之、

彌勒寺緣起、所令尋之處、清圓法橋消息、相副所進官也、先日所令尋未求得

之由、仍所尋之處、相求慮外所進官也、先日緣起未相尋云々、官使未歸云々、

〔元亨三年具注曆裏書〕寬治七年八月廿六日、神榮來語之中、宇佐御五牀太

地薦枕也、但太郎宮以石爲御躰、(是神功皇后令攝御、難隨宮、在豐)以衝五障子

爲御体、伴宮者六年一度行幸之舊典、送件處也云々、

但以黃金爲御体之間、所不知一定也云々、

○黃金ノ犯用ニ依リ、宇佐前大宮司公則ヲ勘問スルコト、四月二十八

日ノ條ニ、宇佐宮命婦問記ノコトヲ議スルコト、本月八日ノ條ニ、宇佐

彌勒寺緣
起

宇佐宮御
體

最勝講

〔後二條師通記〕

〔未書〕最勝講

五月十八日、甲午、天雲不定、○中略陣定ノ午刻參内、○中頭

辨來、仰云、僧侶皆實所參也、最勝講時刻推移、人々相分御前參否如何、被問於人々、相分參御前者如常、中宮大夫新大納言、左衛門督、中納言中將、二位宰相中將參入了、○中民部卿、左兵衛督、右大辨、左大辨、皇太后宮權大夫相率參殿上、次參御前、最勝講如常、已及黃昏、夕座講了、行香如常、僧侶以下退下、衆僧又下、次上達部避參候殿上座、頃之頭辨可令搥夕座鐘、付頭辨令打鐘者、打鐘了、次出居著座、上達部參御前、僧侶廿人參御前儀式如常、御裝束儀見去年記、此間及秉燭、夕座講了如朝座、僧等退下、上達部各以分散、出居下了、○此間脱、被候殿上座、御裝束儀如常、

裏書、證儀者三人、

天台座主大僧正良眞

法印頼尊

別當濟尋

夕座
行香

證儀者

聽衆
講師
問者

聽衆廿人之中、講師十人、問者十人、

一、大僧都覺信、二、少僧都圓禪、

三、隆禪

六、律師賢暹

四、慶僧

五、實源

七、定眞

八、延眞

九、明胤

俊圓

十、永縁

良順

應覺

林禪

眞尊

範憲

行俊

範經

永順

定圓

行香以前、殿下起座給云々、

十九日、乙未、五幕、天陰、○中參殿上座之間、頭辨於小板上、蒙殿下仰、令搥鐘、出

居昇上達部參、○中朝座并夕座次第如常、最勝講畢、

廿二日、戊戌、晴、最勝講結願也、内御物新大納言、治部卿、中納言、二位中將、右兵

衛督、中宮權大夫被候之由、付人申所注載也、出居四人、頭中將宗通、國經、朝堂

童子四人、度者頭中將也行香上達部不足也、仍頭二人奉仕之云々、

十九日、陣定ヲ行ヒ、掌侍藤原實子ノ罪科、和泉、加賀ノ申文、肥後阿蘇

社ノ神體等ヲ議ス、尋テ、左衛門少志中原範政ヲシテ、實子ノ罪科ヲ勘申

セシム、

〔後二條師通記〕

五月十四日、庚寅、晴、申刻參殿下、已及昏、黑欲罷出之間、

結願
内御物忌

度者

寬治七年五月十九日

九四六

加賀計歷
申文

内侍罪科
ノ文書ヲ
定ム

諸國ノ條
々ヲ定ム
阿蘇社神
體ノ事ヲ
定ム

頭辨〔未書〕頭下計歷申文來向加賀國司計歷申文一通被下曰可定申也返給令續先例云々

十九日乙未五墓天陰○中予欲著陣之間左大臣稱所勞退出〔由脫力〕了〔數脱力〕下小板參陣之程〔由脫力〕勸解〔由脫力〕次官出來云神今食内侍罪科事可定申也答曰左府被候令奏事由然則著陣和泉及加賀國條々事召文書被下之示云可定申也〔區房〕左大辨〔區房〕令讀之間已及昏黑此間時範來被下云内侍罪科文書也諸國文書暫間令讀留云々罪科文書等早以可讀也〔左〕大仰史立三几帳如常次第自下令定申〔子細〕見此間頭辨來傳殿仰之云暫間可候歟別事不候可有御出答云早可有御出殿下退出給内侍罪科定文書了加挿文書之上結構轉獻之予取之開見了予定申之中思食二字留之改書狐疑二字令獻云々改直奉之召次官時範付文書等奏之次諸國條々被定申也自筆右大辨定文書了召頭辨付文書等早可奏之〔未書〕實肥後國阿蘇社御去他所定民部卿申云文書等有可定申之事調度文書等予披見了阿蘇社御躰負勝尊安置天宮北門下件僧逃去件事可定也定申了稱所勞由所罷出也件定文可尋之雨脚小散風吹退出

廿三日己亥晴申刻許時範來臨去十九日定文并調度文書所下給也仰宜令左衛門少志中原範政就調度文書勸申罪過有無神今食已及近日今月之中

和泉ノ申
請ヲ聽ス
加賀在廳
官人ノ注
文ヲ上奏
セシム

早勤狀可合上奏者件事内侍掌縫等去年十二月之比罪過事及于今不被決歟行事辨有信來臨去年神今食祭内侍掌縫等相違事仰云任調度文書等可勘申之狀宜仰下使範政也者件勘文今月之中可被上奏早可勘申之由所被仰下也者亥刻雨降

廿五日辛丑〔未書〕頭辨下文書等事五墓晴午刻參高陽院頭辨同參於中門廊相逢和泉三箇條事每事依請加賀計歷依請前司官物之條在廳官人等注文可被上奏者便所下給了

廿七日癸卯〔頭書〕太福〔頭書〕九坎〔頭書〕血晴○中酉刻民部卿來臨罪科事公卿被定之事殊以無之〔左大辨〕右大辨申云内侍掌縫十二司之中同司也件事不得其心云々世間混亂〔淫歎〕爲方無術云々不便尤多

○實子ノ罪名ヲ議スルコト二月十九日ノ條ニ掌侍掌縫等ニ贖銅ヲ課スルコト六月五日ノ條ニ見ユ

二十日丙申内御物忌

〔後二條師通記〕五月廿日丙申甚雨中宮大夫中納言中將新宰相中將〔忠實〕仲實被籠御物忌云々

寬治七年五月二十日

九四七

寬治七年五月二十六日

九四八

廿一日（頭書）丁亥（滅門）復晴陰雨降中宮大夫中納言中將（以下脫）

二十六日（寅）大極殿二於テ臨時百座仁王會ヲ行フ、

〔後二條師通記〕五月十一日丁亥（七鳥）晴（中）百座仁王會定明日被（行カ）之由、

自宇治有殿下御氣色云々稱故障不參也、

廿五日辛丑（五葵）晴午刻參高陽院（中）明日仁王會也參否如何可參候之由、

所令言上也、

廿六日壬寅陰時々有日脚臨時仁王會（百座）於大極殿所被行也早旦袈裟六

條付行事所已刻訖外記雅仲來依權大納言示所參也今日發願午二點也結

願（不注）於左府未不申云々早以此旨可告申也午刻許參高陽院次參八省入

自待賢門著照訓門南座頃之左府參召行事辨有信問僧參否大僧都良意律

師賢暹凡僧等四人未參早可遣催之喚外記問堂童子（圖書）申候之由左府候

世時刻推移仰召辨令打鐘之由左府以下著座（先）是入自照訓門（東西廊）著殿座云々僧侶

相分東西列立威儀相具（有前）自龍尾道昇自中階著左右座朝座了僧侶退而

下自掖云々上達部著照訓門座欲令打鐘之間暗以打鐘奇恠罔極出居不著

可尋僧等參自東西掖著座如朝座可昇歟濫行之所致也自今以後可誠仰也

定

朝座

夕座

行香

作法異例

御布施高座ニ置

夕座之間置布施供奉侍從云々或殿上人取之辨申云於大極殿被行之臨時
仁王會長保之例也左府仰云無殿上人者可令奉仕侍從者惣禮留之行香如
常左府予權大納言治部卿左衛門督右衛門督中納言左兵衛督西方辨有信
少納言惟信大夫史祐俊依不足召加堂童子云々各賦香了香（東方）等納返了著
座帶劔退去於照訓門左府退出頃之漸行腰際不堪流汗頻下治部卿相從留
待賢門下下襲（マ）揖之乘車已以日入

裏書大極殿御裝束儀

庄嚴高座（新被圖畫像一鋪懸）
之次第見於（榮子）

廿七日癸卯（九坎）血晴召外記史史政孝來臨上官等下廊南方立於壇下候昨

日隱廊南方可候連子下立奇恠也須誠仰仁王會殺生禁斷日也為將來所被

誠仰下也以此趣可告左大辨也召使立起殊以不見云々左大辨返事云異樣

所候也可申祐俊宿禰外記定政來參召使不拜仕之以此由所告大外記定俊

也申云大底異外之由所令申也

〔釋家初例抄〕下百座仁王會御布施置高座例

寬治七年十一月廿六日大極殿被行之時御布施置高座（奇代例也）〇五月十一日

寬治七年五月二十六日

九四九

誤ナル

二十八日辰高野山僧教懷寂ス、

〔拾遺往生傳〕上

沙門教懷

沙門教懷者京兆人也幼日出家住興福寺壯

年離寺居小田原山城國久世郡故俗呼曰小田原聖矣其後亦籠於高野山已送十餘

年每日所作兩部大法并阿彌陀供養法常誦大佛頂陀羅尼亦誦阿彌陀大真

言自餘行業非人所知而問寬治七年五月廿七日雖非篤癡聊有病氣其明且

手自模寫不動尊像數百牀即以開眼供養矣漸及已刻相勸衆僧同音念佛合

殺廻向右脇西向寂然氣絕于時春秋九十三今謂其所行兼知死期加以其入

滅日旁有瑞相彼日申刻奇雲俄覆虛空忽暗漸經數刻日景更晴又及昏黑院

內住僧延實快遲各在別房遙聞天樂即趨往諸房告之衆人或人分明聞音或

人髣髴傾耳漸及後夜亦有樂音其音稍遠指西而去

今案往生之人其證未詳而維範閻梨入滅之夕慶念上人夢无量聖衆來迎

閻梨其中教懷上人乘雲而來云云若不生極樂者豈列聖衆乎

〔高野山往生傳〕

沙門教懷

沙門教懷京兆人也幼日出家住興福寺壯年離

寺居小田原山城國久世郡故俗呼曰小田原迎接房聖矣其後移住於高野山已送二

興福寺ニ住ス
小田原聖ト稱ス

不動尊像ヲ模寫シテ供養ス相入滅ノ瑞

小田原聖ト稱ス
迎接房聖ト

如寂教懷ノ遺跡ヲ訪フ

眞影ヲ草庵ニ安置ス

十餘年每日所作兩界修練彌陀行法受持大佛頂陀羅尼誦念阿彌陀眞言自餘行業非人所知而寬治七年五月二十七日雖非篤癡聊有小惱其明且手自模寫不動尊像數百體即以開眼供養漸及已刻相勸衆僧異口同音念佛合殺右脇西面寂然氣絕于時春秋九十三德行之力兼知死期歟入滅之日旁有瑞相彼日申刻奇雲俄覆室內忽暗時刻數移日景更晴又及昏黑院內僧延實快遲各在住房遙聞天樂即往諸房告之衆人或分明聞音或髣髴傾耳漸臨後夜亦有樂音其曲稍遠指西去屢雖有此瑞慥難知其人而維範阿閻梨逝去之夕慶念上人夢無量聖衆來迎閻梨其中教懷上人乘雲而來云々若非往生人者豈列聖衆中乎元曆元年四月之比（聖衆）予參籠高野爲訪彼上人聖跡攀到小田原別所古老住僧出來相談云彼教上人嚴親相公（失名）爲讚州刺史間召犯科之人加苛酷之責彼上人雖爲童稚之幼齡施以憐愍之芳志然猶不堪霜刑已失露命卽成惡靈深結怨念因之相公子孫皆以天亡教懷一人纔雖存命其靈未謝答崇屢示仍避山城移住當山猶號斯處稱小田原平生草庵其跡尙存圖彼眞影安此堂舍見者咽淚聽人斷腸予爲結來緣專禮今影畫圖如舊形貌如新其舌頗垂其眼如瞬右方傾首安坐唱滅之體也袈裟緒結付護佛以紙裹之上

下捻之、近邊住僧來談云、上人怖彼怨家住斯靈地之後、其靈猶現號之黑法、而依持此護永絕其事、臨終正念遂以往生、誠知佛界與魔界一如無二矣、

〔高野春秋〕

五 夏五月廿七日、小田原上人教懷迎接房圓寂、行年九十三、傳云、懷京兆人、

幼年出家、壯齡離寺、住山州小田原里、晚年移此山、故時人呼小田原上人、案以東別所、後世呼來小田原谷者、蓋因之歟、教懷之石影在湯屋谷大聖院、其像樣傳于高往

○真言傳、本朝高僧傳等、異事ナキヲ以テ略ス、

六月丁未 朔 盡

五日、辛陣定ヲ行ヒ、去年神今食ニ闕怠セシ内侍等ノ罪名等ヲ議ス、尋テ、宣旨ヲ下シテ、掌侍掌縫等ニ贖銅ヲ課ス、

〔百練抄〕

五 堀河院

六月五日、諸卿定申法家勘申掌侍已下罪名、已前度々有之、

〔後二條師通記〕

六月一日、丁未、復、陰、小雨降、有信來、範政勘狀獻之、即付時範、

〔未書〕職事仰下條々事

關白殿内覽之頃之還來云、仰云、神今食以前、諸卿定申、先例有無、并被行斷罪、

〔未書〕參菩提講職事

宜令勘申、仰外記并史所尋先例也、陣定者付外記所尋也、斷 戊刻許、自殿下所

〔未書〕職事未定

尋仰也、今日參會菩提講之、女房有無事所尋仰也、隨令尋之處、女房參入之由

〔未書〕神今食以前罪科事

所申也、以此旨令言上了、予所爲之處、子細可問法家、其後可有左右歟、

〔未書〕職事未定

二日、戊申、時々雨降、昨日觸穢未決真偽云々、大外記定俊真人神今食以前被

〔未書〕神今食以前罪科事

行罪科事、例文所獻也、史方未獻云々、

〔未書〕職事未定

此一兩日晚頭風小吹、

〔未書〕職事未定

三日、己酉、陰、小雨灑、先日所召之罪名之例文所令獻也、時範可來之由遣言之

〔未書〕職事未定

處、内藏人一人之外不候、難參仕云々、隨重仰所可參也、以殿上辨欲令奏事由

關白師實
範政ノ内覽
狀ヲ内覽
神今食以
前斷罪ノ
例ヲ勘申
セシム
菩提講
觸穢
大外記定
俊例文ヲ
進ム

寬治七年六月五日

九五四

破中ハ斷
罪ヲ行ハ

穢ノ疑ナ

國任ノ勘

神今食前
ニ定メシ
トス

執筆

〔未考〕掌縫罪科事
之處、左少辨構故障不參、相扶所勞晚頭可參、々高陽院、掌縫等斷罪之例候之
由所申也、有觸穢者不可有件事、穢事之後可有一定歟、
〔未考〕菩提講穢無事
四日庚戌晴時、範參例文二通無結緒之、内覽觸穢之後、可有陣定歟、如只今者
無穢之由、有其聞云々、戌訖惟信來、傳殿下仰之曰、穢疑之事、稱虛言之由、女并
寺僧所令申也、觸穢子細見朔日□□不可有穢之由、所被仰下也、
〔未考〕神今食間不供曉膳内侍罪名事
五日辛亥陰、去年神今食内侍等不供曉膳各以退出、被勘罪名之處、國任勘文
上達部定申云、所勘申縱橫也、今月已以神今食也、其前依可定申參仗儀者、未
訖、民部卿右衛門督中納言左右大辨被候、且可被下文書等歟、人々申云、何難
有哉、令召官人之處、只今罷違所不候也、以隨身番長可召文書歟、爲之如何、民
部卿答曰、稱有先例由、仍召物節、仰可持參文書之由、即所獻之者也、民部卿許
留之、披見了、一々傳下、留右大辨許、閑所見也、此間治部卿參入、申云、殿下已以
參御云々、中宮大夫同參、藤大納言又參、於右大辨觸示文書見否、於遲參公卿
各以可讀之由所示也、仍予早可讀之由、示右大辨了、讀畢自下臆定申了、執筆
左大辨也、於當座書載白紙、書了執筆讀定文、了轉上之、付奏者時範、所令奏也、
還來曰、國任勘文似無所據由、民部卿定申已了、然則國任過失何様可被記哉、

仗座儀式
狼藉ナリ

贖銅請文
近代ナシ

經信仗議
ナ評ス

子細見於左大辨□記云々、其次民部卿欲定申之給如何、早可召遣文書等、
美濃國解并因幡釋家事也、定申儀式如常、書了未讀以前、公卿等分散未得其
心云々、被候大臣陣座之時、尊重深、近代仗座儀式狼藉不盡、似無朝威、心中奇
恠也、高聲耳目不隱、嘲哢至莫過於斯、禁中作法、坐座如尸、常廻治術可有留意
歟、
〔未考〕掌侍等贖銅仰下事
六日壬子、坎、歸忌、九陰、霞霽時、範來、傳宣旨云、掌侍掌縫等罪名事、贖銅之由所
被仰下也、今日明日間、日次不宜來、八日許可宣旨由御氣云々、但贖銅請文近
代無由、官底所申也、參女等罪名事可問範政、國任勘狀似無所據、公卿所申也、
件事相尋先例、可申案内云々、
〔未考〕贖銅事
七日癸丑、凶會、陰、民部卿來臨、言談之訖、世間昏亂密々事也、去五日仗儀定
間、被定行所優美見也、神今食祭掌侍内侍等次第違監、件事不供曉膳所退出
也、仍有催歸參、遂致其勤、分別罪過定多候歟、法家未得其心、依爲歸參從輕罪
也、不供曉膳、遂不參時、尤有理歟、
八日甲寅陰、降雨、此辰時許時範來、仰宣旨云、被下内侍等罪過調度文書宣旨
之趣、見於目錄、召辨有依下給文書等、仰可被行由了、本行事史等稱所勞由不
寬治七年六月五日

九五五

外記義資ノ勘當ヲ救フ

能參入、惟宗政孝供奉之、○中 德子梅子等罪過勘文、即付時範了、十一日、丁巳、凶會、陰外記義資所聽勘當也、爲將來所誠仰也、去五日遲參之故也、

○掌侍藤原實子ノ罪名ヲ勘申セシムルコト、五月十九日ノ條ニ、勘文、法意ニ適セザルニ依リテ、明法博士惟宗國任ノ過狀ヲ徵スルコト、本月十四日ノ條ニ見ユ、

八日、寅、甲、官政、

〔後二條師通記〕

六月八日、甲寅、陰、降雨、○中 今日有官政事、上卿右衛門督參

議○下文 闕ク、

御惱、

〔後二條師通記〕

六月八日、甲寅、陰、降雨、○中 裏書、申刻參内、依御霍亂所馳參也、指事不候、殿下御風氣所御也、秉燭之後、

御霍亂風氣

所出御也、予依仰事歸宅、御風氣宜否付女房令尋之處、別事不候、今程御寢之由、所令申也、

上卿

陰陽師二賜祿

御領ノ後初度行啓

密儀供奉ノ公卿

黃牛ヲ牽ク

忠實後房等大炊殿西北對ニ移ル

十日、辰、丙、太皇太后、子、寛、大炊殿ニ移リ給フ、

〔後二條師通記〕

六月十日、丙辰、晴、○中 酉刻歸二條亭、參大宮行啓、渡御大炊殿云々、供奉之人衣冠也、騎馬、予候御後、有女房後云々、供饌云々、所罷出也、新

大納言、中宮大夫、治部卿、右衛門督、中納言、二位宰相中將、陰陽師道言朝臣有祿、

〔伏見宮御記録〕

諸院宮御移徙部類記

寛治七年六月十日、丙辰、今夜大后初令渡大炊殿給、件、大炊殿成、大后之御御

出立之處、高陽院之馬場殿也、先寄女房車、十兩、檜、毛、次寄御車、唐車也、御車、前駟殿

上人七八人、宮司諸大夫廿人許、依密儀、公卿殿上人諸大夫皆衣冠、權大納言

殿、中宮大夫、治部卿、也、夫、右衛門督、中納言中將、二位宰相中將、右兵衛督、已上、

内府乘車令供奉、其路經西洞院大炊御門町尻、入東御門、暫御車有反閉、道言、

帶、中門邊引黃牛、但無水火童等寄御車於寢殿、無饗饌事、以東面爲大后之御

方、今夜又中納言中將殿令渡同大炊殿西北對給、仍左府相具大盤所、同令渡

給、大盤所御車、檜、毛、女房網代、五兩、入自北御門、寄御車於北中門之方、大后中納言殿依可御

座同處也、

寛治七年六月十日

寛治七年六月十一日 十四日

九五八

太后御渡之間、殿下不令御也、是神今食程、太后已尼御之故云々、

寛治七年六月十日丙辰、今夕太皇太后宮可令渡御、大炊殿仍爲奉仕前駟也、

先是殿下有御贈物云々、戊刻太后渡御、內府權大納言、中宮大夫、治部卿、右衛

師實贈物
ヲ奉ル
庭ニ五穀
ヲ敷ク

門督、中納言殿、二位中將、右兵衛督被扈從、入御自大炊殿東門、先是祭門庭敷

五穀了、渡御之後牽黃牛、近衛官人牽之、次退出、今夜前駟衣冠、非行啓

十一日、雷鳴陣、

〔後二條師通記〕六月十一日丁巳、陰、○中申給雷鳴、令隨身奏故障之、委

師通故障
ノ旨ヲ奏
ス

曲見於北山抄云々、有大將儀、夜半雷鳴、雨脚密下、

十二日、戊午、復、陰、日脚有云々、巳刻訖雨降雷鳴、令隨身申故障、付藏人云

景參高陽院、已及秉燭、雨大降、雨脚宜、此間所罷出也、亥刻雨止、

十四日、申勘文法意二適ハザルニ依リ、明法博士惟宗國任、眞定後ノ過狀ヲ徵

ス、尋テ之ヲ返付ス、

法家勘文
違失ノ先
例ヲ勘ヘ

〔後二條師通記〕六月十一日丁巳、陰、○中外記來參合獻例文云々、

十二日、戊午、復、陰、日脚有云々、巳刻訖雨降雷鳴、○中先是法家勘文有違失

シム

時、例文二通、外記令內覽云々、

十三日、己未、凶會、晴、○中時範來云、下宣旨、子細見於目錄、夜中召有信下給、

十四日、庚申、晴、召外記義資、明法博士國任勘申不叶法意、宜進過狀事、仰件外

記了、

上奏緩怠

十九日、乙丑、雨降、召時範、先日所仰下之國任過狀事、未上奏、經數日爲緩怠、欲

奏事由如何、相尋可被奏歟、

廿一日、丁卯、早且雨止、申刻雨脚密下、外記義資參進、國任之過狀、入筥、持參、秉

燭之程、時範來附過狀了、書樣宜云々、長元之比、實資小野宮右大臣付辨奉、史召之、

無他例云々、

廿五日、辛未、晴、時々雨散、酉刻許暴雨密下、頃之雨脚小宜、戊刻時範來、被下國

任過狀之宣旨、誠將來令赦、夜中召外記傳下了、

○國任、內侍等ノ罪名ヲ勘申スルコト、本月五日ノ條ニ見ユ、

二十七日、酉、發、上皇、法勝寺藥師堂ニ於テ、丈六觀音像ヲ供養セシメ給フ、依

リテ、流人前加賀守藤原爲房ヲ召還シ、又左右獄囚ヲ赦ス、

〔扶桑略記〕三十今上皇帝仁四代六月廿七日、癸酉、上皇於法勝寺、供養丈六

寛治七年六月二十七日

九五九

將來ヲ誠

曼茶羅供

導師布施

曼茶羅供
二僧儀
供

顯季ノ成
功御經并ニ
御願文ノ
議

眞言供養
ノ儀

定文書様

寬治七年六月二十七日

九六〇

觀音像、曼茶羅供、導師權僧正隆明、讚衆廿人、同日抽出赦免、左右獄徒各三人、十一本
又流人前加賀守藤原爲房有勅召返赦免、

〔後二條師通記〕

〔未書〕六觀音供養事
六月廿七日癸酉、

血忌、早旦、雨止、辰刻參殿、巳時歸宅、有六觀音供養事、申時參法勝寺、御導師參路了、上有緣道、左府問民部卿之處、先例有云々、導師權僧正隆明、讚衆廿人、就中有僧綱二人、勝覺律師、俊觀法師、戊刻事訖、導師布施、治部卿自餘殿上人等取之、自北大門參入云々、勝陀羅供者無僧儀云々、今日有伴饌云々、異儀也、

〔元亨二年具注曆裏書〕

〔五書〕

寬治七年六月十二日、自頭辨送書狀云、來廿七日於法勝寺、公家可被供養、丈六觀音、顯季成功、依御定、於藥師堂可奉供養、御經并御願文等可在乎云々、令申云、御經前例有無不定、可隨時議、御願文後日被作、御堂可有供養者、後日可有之、若後日可無供養者、今度可有御願文、

十七日、頭辨書狀云、來廿七日御佛供養之日、眞言供養也、讚衆廿人、可有名香哉、如何、又其御裝束大膳可被送之者、近代眞言供養之日、不見名香由示了、阿闍梨隆明僧正云々、

六觀音供養法名導師、權僧正、讚衆廿口之內、僧綱二口、權律師勝覺、權律師俊觀、件僧綱二

導師裝束
僧正香染
ヲ著ス儀
法式ニ載
セズ

赤色裝束
ヲ給フ例

六觀音御
修法

堺書之、凡僧十八口、書之、件可召僧名、頭辨先書之、令入筥也、廿七日午二點若申云々、又副廿五日御佛可渡御日時、而上脚被口件日時、內々可奏由被示仰之、付頭辨被內覽云々、
廿一日、頭辨示送曰、來廿七日隆明僧正裝束不可給香染歟、至天台座主故仁和宮等者別事也、〔寺院ノ〕隨可相尋者、返事曰、僧正著香染之事、雖不載法式、相承之例也、去永承七年正月廿六日、大極殿千僧御讀經、觀音之日、大僧正明尊、僧正眞範等參入、後日眞範著香染、雖非山座主并爲第二、抑度々公家給僧正裝束時、不必給香染、

永承三年三月二日與福寺供養、導師大僧正明尊、
延久三年十二月廿六日圓明寺供養、呪願僧正長信、
並給赤色裝束也、

又法勝寺供養如此也、七年院令參金峰山給之時、導師、權僧正隆明、同不給香染歟、至仁和寺宮度々被給香染裝束者、可謂別事歟、

〔元亨三年具注曆裏書〕

〔五書〕

寬治七年七月二日、丁丑、法勝寺六觀音御修法、

權僧正隆明、千手、權少僧都林豪、聖、經範僧都、不空、法眼長覺、馬頭、權律師貞尋、十一、仁顯、如意、

寬治七年六月二十七日

九六一

同結願

十一面觀音御修法ヲ延行ス

法興院八講日作文有無ノ議

初度

參會ノ人々

寛治七年六月二十八日

四日、己卯、白川六觀音御修法、今日結願云々、

〔京都御所東山御文庫記錄〕 修法要抄

六觀音法内十一面延修自餘結願事

時範記云、寛治七年八月九日、甲寅、今夕千手、聖觀音、馬頭、不空、絹索、如意輪、御修法結願、但十一面御修法眞尋奉延行畢、

〔公卿補任〕

天永二年

參議正四位上藤爲房六十、同七寛治六廿六被聽歸京、

○爲房ヲ阿波ニ流スコト、六年九月二十八日ノ條ニ見ユ、

二十八日、戊申關白師實、高陽院ニ於テ、作文會ヲ催ス、

〔後二條師通記〕

六月廿四日、庚午、天晴、碧落青□、有信朝臣來傳殿仰申云、來

廿八日可有御作文、而相當法興院御八講、爲之如何、何有難乎、猶有事疑、他吉

日候者可被行歟、可召之文人等、此中可然之人可被撰申、大略如此云々、

廿六日、壬申、雨降、略中、新大納言弟僧仁和寺住僧也、依鬱憤、御作文候否、令尋殿邊、返

事云、可有御作文之由、有御氣色云々、

廿八日、甲戌、天晴、酉刻參殿、於高陽院初有御作文事、人々裝束衣冠直衣、殿上

人事也、左大臣信實、予信實、民部卿、右大辨、左大辨、文人等、殿上人頭辨季仲、右中辨師賴、

饗饌

講師讀師

是月、勘解由使、相模解文ヲ勘申ス、

〔朝野群載〕

十九 諸國公文

中

勘解由使

勘相模國解文事

請因准先例被減省前前司源朝臣師光任終永保二、次守藤原朝臣兼仲任

同三、應德元二、次守同棟綱任同三、寛治元二三、當任同四五六并十一个年

間、公廩雜稻每年八万四千四百廿二束狀、

一出舉正稅雜稻本額借貸無實事、

式數八十六万八千百廿束九把五分

例減省八万四千四百廿二束

公廩稻八千四百廿二束

雜稻七万六千束

寛治七年六月是月

減省

出舉正稅雜稻

公廩雜稻

定舉

夷俘囚料二万束
 鎮守官公廨二万束
 救急料三万六千束
 定舉七十八万三千六百九十八束九把五分

正稅三十万束

公廨二十九万五千五百七十八束

雜稻十九万二千二百二十束九把五分

藥分稻

藥分稻一万束

大安寺料二万六千九百束

夷俘囚料八千六百束

救急料二万五千束

修理池溝料三万束

大學寮料一万束

文殊會料二千束

官牧馬牛直五千五百八十三束

鎮守官公廨三万四千卅七束九把五分

造寺料四万束

借貸

借貸万五千束

書生料八千束

驛子料七千束

正稅公廨
雜稻等ノ
實ナシ

新司守從五位下高階朝臣經敏勘云、應在式數正稅公廨雜稻八十六万八千
 百廿束九把五分、借貸万五千束、并八十八万三千百廿束九把五分、内例減省
 八万四千四百廿二束、定舉七十八万三千六百九十八束九把五分、借貸万五
 千束、并七十九万八千六百九十八束九把五分、悉是無實、其由如何、前司守從
 五位下藤原朝臣棟綱陳云、件本類内、例減省八万四千四百廿二束、依例言上、
 解文即蒙裁許之例也、其外定舉借貸并七十九万六千九百九十八束九把五分
 爲無實、已經數代、其由注載代代狀帳言上又畢、但恒例佛神用途并例進交易
 雜物料、徵雜稻於作田無闕例用、是則非一任事、已爲數代之例也、專無公損、依
 實被錄矣、新司經敏重勘云、正稅者是官物之本、不捨之備也、何陳流例之詞空
 失分付之勤、若公家損色被下用之日、縱雖勵勤公、更廻何術哉、早勤辨填、備之

分付前司棟綱重陳云、牙輪利常致未納、況乎無實本穎、難堪辨填、殊施遼遠、被余釋矣、暫勘狀前司陳狀同前、

右左辨官仰云、件解文宜勘申者、檢相模國言上不與前司守從五位下藤原朝臣棟綱解由狀、所注如件、仍勘申、

寛治七年六月日

主典三善

〔參考〕

〔延喜式〕

主稅上

諸國出舉正稅公廩雜稻、其十八束、此正稅公廩、其會料二千束、藥分料一万束、鎮守府公廩五万四千卅七束、修理池溝新三万束、救急新七万一千束、俘囚新二万八千六百束、官牧馬牛直五千五百八十三束、

相模國ノ
正稅等ノ
制

七月大兩子朔盡

七日壬午

乞巧奠、關白師實、高陽院ニ於テ、和歌會ヲ催ス、

〔後二條師通記〕

六月廿九日乙亥

晴、盛長來傳殿仰申云、來七日作文可有和歌一度之由、所被仰也、但人々申云、作文許可候之由、人々所被申也、月前織女

風爲扇、心字、牛女有付會、可難之由、有其聞云々、仰左大辨改定歟、於序者伊勢守孝言朝臣也、不經幾程、擇拔人々可召之處、定愁氣哉、皆實可參

也、○中略

定有訛謬哉、混合難見、閑可清書者也、

七月七日壬午

立秋、天晴、申刻許參殿、不居饗饌、於虹橋先有絲竹事、居菓子許

之、已及秉燭、瓊章置之、講師了、次女房六人和歌、自御簾中置扇上被出之云々、右中辨承仰、予取之置之、以有信令讀之、歸宅爲違方渡御堂云、

織女者、扇乃風乃涼、さに天乃河者、波立野益牟御返

伊都より裳扇乃風乃涼、しさに織女都女、いられしかるらむ

〔元亨三年具注曆裏書〕

寛治七年七月七日、乞巧奠日、被行佛事、見天曆御記

寛治七年七月七日

作文和歌ノ沙汰

序者

管絃

師通法成寺ニ方違ス

寛治七年七月十三日

九六八

云々、宇治殿於此日被行講、廻向、
云々、牛女云々、又和歌アリ云々、

十三日、子權律師明實寂ス、

〔拾遺往生傳〕上 權律師明實 權律師明實者、前長門守共方之舍弟也、生

年十五出家、十七受戒、自爾以降、每日圖繪供養文殊像九躰、同修三時供養法、
又參詣根本中堂、二千八百箇日、手自備香花、供養藥師佛、凡其顯密行業、非人
所知、而間寛治七年七月十三日、已刻對文殊像端坐入滅、從彼日至于十五日、
容顏不變、薰香猶餘、凡厥近習人、莫不染奇香、葬香送之後、經三四日、門弟致墓
所讀經廻向、異香發越、猶以如故、漸及數日、自以消矣、

〔僧綱補任〕寺本 律師明實 永保二年十二月卅日任、二會勞、前肥前守、藤通範子、

〔歷代皇紀〕堀河院裏書 律師明實 寛治六年七月十二日卒、六十號極樂

〔尊卑分脈〕藤氏、末茂孫、
通範從五下、肥前守、
共方從五位、長門守、

世系

極樂房下
號ス

文殊像ヲ
供養シ三
時供養法
ヲ修ス
入寂ノ端
相

行家上東門院藏人、
明實權律師、
頼尊母、

○眞言傳、本朝高僧傳異事ナキヲ以テ略ス、

十九日、甲午、祈年穀奉幣、
(奉幣)依幣料不足、祈穀幣延引、

〔後二條師通記〕七月十二日、丁亥、滅門、早旦暗陰、辰刻晴、祈年奉幣延引、幣料
已以不足、仍被逗留也、
(奉幣)後齋也、

十九日、甲午、復、天晴、中略、相撲ノコトニカ、今日廿一社奉幣使也、相當後
齋被行之例如常、

廿日、乙未、天晴、中略、奉幣齋日也、

〔元亨三年具注曆裏書〕寛治七年七月九日、甲申、右少辨送書曰、服蒜之人、私
事間可忌何ケ日許乎、自一昨日不服、奉幣十二日云々、返事神事不可忌蒜、但

依有石清水、祇園、北野、日吉等幣、可忌有鼻程云々、

二十日、乙未、是ヨリ先、明法博士惟宗國任ヲシテ、東寺成願寺ノ相論セル伊
勢多氣、飯野兩郡田地ノ理非ヲ勘申セシム、是日、國任、勘文ヲ上ル、

寛治七年七月十九日 二十日

九六九

幣料不足
ニ依リテ
延引ス

二十一社
ニ奉幣ス

神事ニ蒜
ヲ忌マズ

〔東寺百合文書〕

〇山一之三十二

〔國任〕

勸申東寺與成願寺相論伊勢國管多氣飯野兩郡田地地理非事

右左小史惟宗盛忠仰云左中辨藤原朝臣季仲傳宣大納言源朝臣經信宣奉勸東寺并成願寺相論伊勢國管多氣飯野兩郡所領田地宜仰明法博士惟宗國任任官使并大神宮注文兩方調度文書等令勸申彼是理非者調度文書雖多其數唯所要實悉不注載矣者被檢交替式云天平十四年勝寶七年靈龜四年延曆五年四度圖籍常留皆爲證驗又條々畿内田籍除證年之外每經一班爲例除弃其七道諸國留田籍進四圖者令任宣旨之趣方案是非之相東寺所進承和二年同十二年兩度省符領之地各載坪付又依承平二年官符同十月伊勢大神宮司請文之中同注條里坪付而成願寺解狀者雖稱勸施入之由无副彼施入之狀相論之地難知坪付爰天喜六年應德二年適注條里坪付雖致田畠沙汰或別當三綱各加署名爲徵地利官物下知庄司之狀也或不副寺牒庄司一人恣注申文暗諸郡判之書也專非本券難備證信但如副進民部省勸文者庄田四町六段二百五十步相叶圖帳殘十三町圖帳朽損者重條之東寺

四度圖籍備ハル

成願寺解狀

相論地ノ坪付分明ナラズ

民部省ナシテ東寺ノ領ヲ尋ネ

兩寺ヨリ坪付ヲ徴スベシ

承之比類成省符東寺文書若有其實者何以彼寺之地可注他領之由哉又偏依田圖可其理者朽損之圖非无疑歟偏號成願寺之領難棄置東寺之訴狀則本願施入之官符田地相傳之公驗可召成願寺又下知民部省可被尋東寺領也又如官使注文者在國於任檢田之時雖下成願寺之使已无副東寺之使空以一寺之使者何決兩寺之相論哉因茲无副使者不出庄司之條可被問東寺也就中件兩寺相論之地互注坪付須致其訴也然而不注條里坪付暗稱往古領地情倡訴訟之旨徒爲牢籠之詞是以可獻坪付之由可召兩寺也慥尋問件條之後可決裁決彼訴而已勸申如件

寛治七年七月廿日 正六位上行明法博士兼左衛門少志備後權掾惟宗朝臣國任

○東寺別當ヲシテ成願寺別當能算ノ訴ヲ辨申セシムルコト寛治五年六月二十二日ノ條ニ中原範政ヲシテ相論地ヲ勸申セシムルコト
康和元年閏九月十一日ノ條ニ見ユ

二十七日内御物忌

〔後二條師通記〕七月廿六日辛丑歸忌天晴藏人宗佐來云略○明日御物忌也可籠之由所被仰也

寛治七年七月二十七日

師通御物
忌籠ル

東山道相
撲使出羽
守ト合戰

祈年穀奉
幣後齋日
ニ行フ

近衛府相
撲事始
相撲參院

内取

廿七日壬寅天晴子刻參内籠御物忌也

三十日巳相撲

〔後二條師通記〕

〔未考〕相撲使出羽守合戰事六月十八日甲子辰九食時雨降東山道相撲使秦正重爲出羽

守信明合戰之申文二通注文獻之付年預中將仰云可附奏者云々去十七日

自左大辨許送申文二通相撲使犯非法之事所愁申也

〔未考〕相撲最手參上七月十九日甲午復天晴略年中預中將來最手奏罷給之由其次府事々初明

〔未考〕後齋也日可被初者爲之如何其次令奏云々今日廿一社奉幣使也相當後齋被行之

例如常

〔未考〕府事始相撲廿日乙未天晴相撲事於府中所被始行也奉幣齋日也

〔未考〕相撲無樂不著染下襲事殿仰也廿三日戊戌行天晴相撲參院云々無樂之時染下襲不可著由所仰也殿下

御消息如此云々

〔未考〕藏人來仰可參内取之由廿六日辛丑歸忌天晴藏人宗佐來云告可有内取之由略下

〔未考〕内取儀廿八日癸卯天晴未刻束帶參殿上座御裝束次第如去年議同刻相撲人等參

入將監少將有賢前行此間就座了暴雨密下雨脚宜隙頭辨中將來云告召之

由不著帶劔於小板〔未考〕兼召奏即奉之取副於笏參御前如常取了

召合

〔未考〕召合卅日乙巳天晴未刻參内右大臣爲日上召大外記定俊真人仰可召侍從之由

〔未考〕予例下襲中納言朽葉下襲也内侍臨檻連行經陣壁後入自西中門著坐昇自西階經簀子著坐出居著之宗隆

〔未考〕取奏事木工頭少次上官著階下座予避座立壇下令催次右大將下左右奏持來將忠

將能俊各以見物了挿鳥口右大將如此予昇自西階更南折經簀子敷於小筵

邊跪而膝行就御簾下以左手褰御簾奉奏文小退候拔笏右廻著座左廻内侍

寄大宋屏風下簀子敷著小筵了相撲立合三府如常右三府開扇仕之寬治七

年以上不見自今年所出來也版位未降内辨前右將監出來取之置壇上一番

左常則右高基突膝罷入二番内豎饌口可居衝重之由右將不參予令隨身召左將即參

取外座衝重居欄干下勸盃奉仕有家將下簀子敷傳取復本座次第了移著簀

〔未考〕御覽儀子之已及黃昏各以分散大將退出參東三條殿

八月一日丙午減天晴未刻參内此間暴雨雷鳴著右仗座召大外記仰侍從不

可著之由内侍臨檻上達部參上如昨召之後内辨著座隨勅答右大丞秀貞進

禮右宗弘猶可召左歟可尋白丁進禮一度也可被尋云々

〔未考〕召相撲人給饌兩三人御寺大衆亂發六日辛亥天晴召左相撲人五六人許給葦酒饗饌事依興福寺大衆騷動延引

八日癸丑朝間雨灑巳時許天晴略中

御覽儀

師通興福
寺僧徒福
蜂起延引
引ス

寬治七年七月是月

九七四

裏、惟遠尾張、重廉相撲使相具參之處、俄號最手惟助子、所遣右方也、家繼武者仲宗朝臣男、腰際不居起不參、依院仰留府使、

〔樗囊抄〕

〔未嘗〕院仰不足言事
相撲年中行事 卅日例 寬治七

里内〔寬治〕 同略 中七〔海川院〕 同

止樂 寬治七

樂ヲ停ム

是月、我邊民等、宋人ト互シテ、高麗西海道安西都護府轄下延平島ヲ侵ス、

〔高麗史〕

宣宗 癸酉十年七月癸未、西海道按察使奏、安西都護府轄下延平

島巡檢軍捕海船一艘、所載宋人十二、倭人十九、有弓箭、刀劍、甲冑、并水銀、眞珠、硫黃、法螺等物、必是兩國海賊共欲侵我邊鄙者也、其兵仗等物、請收納官所、捕海賊、並配嶺外、賞其巡捕軍士、從之、

兵仗ヲ沒收セラル

八月丙午朔

二日、丁未、釋奠、

〔後二條師通記〕

釋奠 八月二日、丁未、天晴、

四日、西、北野祭、

〔後二條師通記〕

八月四日、己酉、九坎、天晴、北野祭、

八日、〔未嘗〕院仰送事等 上皇、近衛府地大宮西方ヲ以テ、某莊ト交換セントシ給フ、

〔後二條師通記〕

八月八日、癸丑、朝間雨灑、巳時許、天晴、申刻、年預中將來、院仰

云、府地大宮西方也、以庄被換之由所申也、無指故奇、恠罔極、如本欲返置也、
九月廿九日、癸卯、狼藉、雨降、日脚不見、〔中參〕大炊殿、左近府庄、蘭人々所遣也、
自本府申判之處、左大辨有往古歟、於今度者可無便宜之、次將等判候哉、

十五日、〔未嘗〕放生會事問左大辨 石清水放生會、

〔後二條師通記〕

八月十二日、丁巳、天晴、左大辨來、放生會間、何事有哉、左大辨

答云、別事不候、上達部座并淀邊道路遣人可令見者也、川水少云々、夜半雷鳴

暴雨、

〔未嘗〕依放生會上卿出立事 十四日、己未、陰雨時々降、〔中參〕午時天晴、未刻出立、先是乘尻於釣殿邊騎馬、經

寬治七年八月二日 四日 八日 十五日

九七五

寬治七年八月十五日

九七六

大石邊、渡虹橋東中間、先是前掃、次奉幣、湯、如、家司一人束帶渡了、此間座於對御烏帽子御坐、自餘之人候、簀子敷、自北門出立、自中門大路到大宮、更南折、到二條辻、更西折、到羅城門、戊刻著宿院、

〔未書〕於宿院立幣事

白妙幣也、

裏、依明日衰日、今日幣立之、不攝也、吉方也、餘慶交深、著束帶於宿院南庭

網膳源義

有隙、

十五日、庚申、寅刻甚雨無隙、鷄二音、膳等如恒、沐浴束帶、從賴清許、令申刻限成

〔未書〕放生會事

之由、甚雨止、已及拂曉、相待中納言之間云々、相本祓了、幣取說長朝臣入自宿院南

掖門、經雜舍北并西、著西舍座、御輿下御之由、令尋之處、未下御之、率予以下等

出自南門、參鳥居西舍佇立、鳥居內立輕幄一字、御輿三所、先是拜了著靴前行、

舞臺西方立之、北上東面、當西舍巽角立、上達部列立、先是僧樂人等參向云々、

其後御行幸、經舞臺上、著御々所、召一度、奉寄南階、磬折如居、御輿昇出了、於西

舍南邊立、敷舞臺北座敷筵、其上有高麗一枚、其前設小筵、敷砌下筵、爲俗別當

云々、予著座、義綱朝臣取幣奉之、兩段再拜、幣三了、付俗別當責任、給著坐、

打手八度、予從之、著西舍座、次第如式、相撲一番之間、甚雨降、七八番程雨止、

神事ニ依
リテ師通
簡ヲ立ツ

〔未書〕放生會事

〔備力〕

裏書、申刻許陰日脚不見、鶴飛禮堂上問、鳥居入云々、吉事也、秉燭之間、事訖

著靴、列立庭中、寄御輿、未昇出前、上達部漸進前行如初、御輿昇御上御在所

云々、自本路歸、經東禮堂前、更西折、著宿院、相尋別當之處、未見云々、解束帶

之間、別當參入之由、所申也、御輿下御之間、爲奉仕所參也、馬一匹給、著宿裝

束出立之間、權大納言馬一疋給、雖爲供馬、治部卿、左大辨有何難哉、

〔元亨三年具注曆裏書〕〔五題〕寬治七年八月十二日、放生會事也、內府自今日被立

簡、至來十五日、僧尼重輕服不淨之輩不可參入、

十四日、東子午屋南三間設公卿饌、高坏十前許障子北設諸大夫饌、懸盤并寺

家所設也、

次錫杖、乘左右各十三人、登舞臺、供錫杖、進時持之、退時倒持、

〔京都御所東山御文庫記錄〕放生會氏公卿有之時、他姓之卿相不向之例

同、〔季向〕大江匡房

源 雅俊

寬治七年八月十五日

九七七

古今無雙

十八日、癸亥、京都大雨洪水、

〔扶桑略記〕

三十一 今上皇帝 善十四代

八月十八日、癸亥、終日大雨、洪水、古今無雙、

〔後二條師通記〕

八月七日、壬子、天晴、亥刻暴雨密下、

八日、癸丑、朝間雨灑、巳時許天晴、

十二日、丁巳、天晴、○中、夜半雷鳴暴雨、

十三日、戊午、九坎、終日甚雨、

十四日、己未、陰、雨時々降、

十五日、庚申、寅刻甚雨無隙、

十六日、辛酉、凶會、陰、時々雨降、

十七日、壬戌、陰、○中、子刻甚雨降、

十八日、癸亥、甚雨密降、雷鳴、晚頭雨宜、

天台座主良眞、延曆寺衆徒ノ座主房ヲ破壞セシニ依リ、僧兵ヲ集メテ西

塔ヲ襲ハシム、尋テ、良眞、上表シテ職ヲ辭ス、

〔扶桑略記〕

三十一 今上皇帝 善十四代

八月六日、辛亥、山上大衆數千人引率、切破

座主大僧正良眞之房已了、

西塔九房
ヲ壞ル

十八日、癸亥、○中、略、大雨洪水、件日座主良眞催上數百兵士、先上東塔、斫倒九

房、

十九日、甲子、未明、件兵士等亂入西塔、欲伐諸房、于時西塔橫川之大衆等防戰

追返、座主之方兵軍等、悉皆被瘡、迹散既了、爰山上大衆押入東塔之西谷南澗、

斫壞座主弟子之房舍六十餘宇、並燒坂下眷屬之舍八十餘宇已了、

〔百練抄〕

五 堀河天皇

八月六日、天台衆徒切座主良眞房、追却山上、

〔後二條師通記〕

八月六日、辛亥、天晴、○中、天台座主房被切損云々、

十八日、癸亥、甚雨密降、雷鳴、晚頭雨宜、座主大衆相加兵事、僧房被切了由承之、

十九日、甲子、天陰、○中、天台山合戰之由、有其聞云々、世間謠亂、

廿一日、丙寅、天晴、○中、東坂下大衆等小屋等燒亡云々、

廿二日、丁卯、天晴、○中、

天台座主奉辭書云々、

廿八日、癸酉、陰、○中、酉刻參內、乘燭、著右仗座、○中、其次仰云、明日天台大衆下

向之由云々、○下、

〔華頂要略〕

百二十一 天台座主記二

梨下青蓮房祖師 第卅六法印權大僧都良眞房、融 治山十二年

座主弟子
ノ房舍ヲ
壞ス

寬治七年八月二十一日

九八〇

法花堂ノ
造營ヲ停

同七年(寛治)酉八月六日、大衆伐拂圓融房、追却山門、同廿日、辭退座主職、三、七、十

〔山門堂舎記〕法花堂 寬治七年七月五日、座主良眞造作始之、同七日壞却

造營之□、而依少事、八月十六日、西塔橫川并東塔東谷虛空藏尾、大衆等、伐座

主房、山門追却、仍造營打留訖、

〔僧綱補任〕五 ○興福寺本 大僧正良眞 依大衆訴、停座主任、但獻辭狀之後、

被補其替、

〔歷代編年集成〕十九 白川院 大僧都良眞 寬治四年八月四日、大衆拂之畢、同

年八月十八日、與大衆合戰、

〔歷代編年集成〕十九 堀河院 天台座主僧正良眞 子細見上、切本房追却、

〔十三代要略〕堀河 八月五日、天台大衆伐座主良眞房、追却山上、

〔歷代皇紀〕三 堀河院裏書 天台座主 僧正良眞 同七年八月六日、切寺坊

追却山門畢、九月日辭座主、

○僧正仁覺ヲ天台座主トナスコト、九月十一日ノ條ニ見ユ、

二十一日、丙寅近江國司ヲシテ、同國中津莊ニ、法花寺ノ濫妨ヲ停止セシム、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

國司

□止京法花寺坊、領掌限

郡

内荒

田參拾肆町事、

限東十條十里中畔、限南十條南畔、

四至、限西濱崎、限北八條北畔、

右得彼寺去四月日陳狀、今年四月八日宣旨、得彼院去正月十六日解狀

、備謹檢案内、件津庄者、本是官省符之地、代々國司敢不收公、四至之内檢田

使不入勘、爲不輸租田已經年序、加之前司敦家朝臣宛課役之日、重可停止國

役之由、蒙宣旨畢、年來之間、又無法花寺論、爰去寬治五年十一月卅日宣旨、備

應任國司陳狀、免除京法花寺所領字野洲庄事、右得彼國司去正月廿二日陳

狀、備被左辨官寬治三年十一月廿三日宣旨、得彼寺今月十四日奏狀、備謹

檢案内、件庄本免田百十八町、往古國司敢無收公、稱修理職寄人、敢不辨濟地

利、望請且堆傍例、本免之内六十四町餘、被優免、且修理職寄人耕作被停止者、

權大納言源朝臣經信宣、奉勅宣仰彼國令辨申、件子細者、就宣旨狀、謹檢案内、

件庄勅施入官省符之處也、寺家所訴尤有謂、任本免數可被免除、除歟、但至于修

寬治七年八月二十一日

九八一

不輸租田

野洲莊本
免田

野洲莊ノ外
免除地ノ外
中津庄ノ外
四至ノ外

課役ヲ宛
無シルコト

寛治七年八月二十一日

九八二

理職寄人耕作段者非國之所知可被下知本職歟者同宣奉勅件庄宜仰彼國任國司陳狀早令免除者件寺申下宣旨之後依申請儘以領掌是則中津庄四至之外也件四至者東限十條十里中畔南限十條南畔西限濱崎北限八條北畔也寺家使等注件寺田之日此四至之内荒田參拾餘町推以注入寄事於修理職寄人申下宣旨之後注入庄領内荒田之條未知其理但彼寺稱勅施入此庄又官省符也雖有先格依後符被改易所前之例也然則早被下宣旨將隨裁斷者權左中辨源朝臣基綱傳宣大納言源朝臣經信宣奉勅宜仰彼寺令辨申件子細者謹所請如件抑就宣旨狀案事晴（晴カ）至專寺領（既カ）爲官省符庄然而近代被免除陳々載代々免判而其殘今半□□□例所申請也又修理職渡守爲□□□不出地子拘□□□蒙裁許宣旨□□□門院申狀者□□□事情件條全無實也當庄元爲□省符又中津庄同爲官省符庄□□無牢籠中津庄四至東十條十里南畔南十條南畔西濱崎北八條北畔全是内不相交寺家之庄件中津庄四至顯然也隨又無宛課役者正二位行大納言兼民部卿皇后宮大夫源朝臣經信宣奉勅件庄宜仰彼國任本四至令停止他妨者國宜承知依宣行之符到奉行

正四位下行權左中辨源朝臣判修理左宮城判官正五位下行左大史算博士伊加守小槻宿禰
寛治七年八月廿一日

二十二日、僧正仁覺等ヲシテ、五壇法ヲ内裏北對ニ修セシメ、權大僧都定賢ヲシテ、孔雀經法ヲ關白師實ノ二條第二修セシム、是日、二間ニ最勝王經供養アリ、

〔五壇法記〕○山城（寛治七）同年八月廿二日被修之禁中、

不（前書）僧正仁覺右大臣、降（前書）法印仁源京極大、
軍（前書）法眼長覺内大臣、大（前書）權少僧都經範三河守、
金（前書）法眼長覺内大臣、

五大尊像
ヲ供養ス
出御
孔雀經法

或記云、八月廿二日、甘露今夜北對西妻殿下御直廬也、被始行五壇法、件五大尊像前日於晝御座供養已了、今夜重被修五壇法、阿闍梨如右發願之間、有出御、左少將有家朝臣候御劔侍臣等候脂燭、初終之後、還御本殿、御加持如例、又於二間被供養最勝王經、今夜又於便所、有孔雀經法、宗長也、定賢

〔曼殊院文書〕○山城（八カ）禁裏五壇
寛治七年七月廿二日、於禁中直廬、被修之、

寛治七年八月二十二日

九八三

寬治七年八月二十二日

九八四

中 僧正仁覺 降 法印仁宗
軍 權大僧都良意 大 權少僧都經範
金 法眼長覺

〔三僧記類聚〕

六

孔雀經法廢朝間結願例、付穢中御修法例、

寬治七年九月十二日奏院云、仰云孔雀經御修法三、七於御前可被結願來十四日、依廢朝去五日皇宮崩、昨日奏遣令、廢朝ノ條參看、之間不可賜度者、檢前例應和四年五月七日依中宮安子崩給主上令服錫紵給、九日朝孔雀經法於御前有結願、兼賜度者、其夕令除錫紵給由見于御記、

〔元亨三年具注曆裏書〕

〔江記〕

寬治七年八月廿二日、丁卯、今日於二間被始最勝講、

僧五口、少僧都圓禪、權律師賢暹、權律師慶增、永緣、明胤等也、上卿不候、堂童子等、
自今日被始五壇御修被行、對主上令逢時給、藏人頭五位藏人等候御共、
中壇仁覺、降三世仁源、軍都大、都大、大威德都經、金剛夜叉法眼、
被始之間、服者不候云々、山、大、衆、叢、急、後、朝、以、山、僧、被、始、種、々、御、願、是、
又被始孔雀經法、權大僧都定賢於二條北家行之、
廿三日、右中辨語曰、昨日孔雀經御修法アサリ愁申云、於宗第一之法也、何故

孔雀經法
結願二依
廢朝ノ條
ナリテ度者
賜ハズ

定賢孔雀
經御修法
ヲ宮外ニ

行フヲ難

孔雀經御
修法伴僧

於宮外可被行乎、五壇法者尋常之法也、何還在宮內、仍久不始之、依之五壇法者七日可被行、其後孔雀經法可入宮內、三七日可被行也、定賢重申云、孔雀經不可過七日、仍早可終之、於宮內可被行者、治部卿定賢奉仰書消息、送於孔雀經阿闍梨許、催被始法之、著床子之時、辨一時見合著床子、史又□□見辨著了、
九月十三日、丁亥、〔請カ〕尋朝阿闍梨來談、〔請カ〕自去月廿日所被行之孔雀經御

修法定賢僧都伴僧廿人、
勝覺法眼護摩、朝元子、親光子、伊經子、義忠子、越前賴成子、定範子、備後左衛門大夫俊季、
昭十二、長朝俊輔子、阿波章親子、伊綱子、聖天、遠江守公房子、親行子、經兼子、經仲孫、行緣寂朝、源意嚴意、重賢覺譽、良基枝、
雅筑前、勝實行緣弟、勝成

此間辭退人々經基阿闍梨二七日後辭、其替隆真、
重房子、其替隆真、

明日可結願、以儀式可修、

五大尊法者過明後日月蝕、九月十五日、可結願、

御前大般若御讀經、自去七月二日同可過月蝕、○大般若、

〔五壇法日記〕 寬治七年七月廿二日、廿三日被始行五壇法、

寬治七年八月二十二日

九八五

寬治七年八月二十六日

不動

僧正仁覺降三法印仁宗或本云、

權大僧都良意軍茶

權少僧都經範大威

法眼長覺金剛

九八六

○阿婆縛抄異事ナキヲ以テ略ス、

二十六日辛未興福寺衆徒大舉入京シテ、春日社領近江市御莊ニ、近江守高階爲家ノ濫妨セシコトヲ訴フ、尋デ、爲家ヲ土佐ニ配流ス、

〔扶桑略記〕

三十三

今上皇帝

七

仁四代

八月廿二日、丁卯、山階寺大衆獻上奏狀、其

詞云、興福寺僧綱大法師等誠惶誠恐謹言、請被殊蒙處分、任傍例、行罪科、近江守爲家朝臣、損亡春日御社市御莊、打凌神人兼禁獄狀、右謹檢舊記、當社者靈異揭焉之處、鎮護國家之砌也、我大日本國者依天照大神勅天兒屋根命之扶持力也、是以上衛王室、下撫民家朝庭、低頭黔黎束手、日本九州之域盡皆賴其扶持、海內萬民之輩莫不仰其威重、就中大織冠建立釋迦像、淡海公草創興福寺者、爲盛王室全社稷也、自爾以降、代代帝王皇后皆出此氏、春日明神守護興福寺、興福寺扶持春日明神、云云、社處一代同社、愁即寺愁也、爰近江國蒲生郡市御莊者、爲當社之領、致節供之勤、而守爲家朝臣僞雇官使、副放私使、損亡莊家、禁獄神人、思其罪僣、可處重科、近則大宰大貳實政卿、依宇佐宮訴貶謫東涯最外之國、賀州刺史爲房朝臣、依比叡社愁、遷配南海幽僻之地、彼雖朝廷之

興福寺衆徒ノ奏狀

社ノ愁ハ即チ寺ノ愁爲家ノ暴狀爲政爲房實例ニ依ルベシ

七大寺僧徒上洛ス

阿波守爲遠ヲ停ム

春日山震動ス
神民神木鏡鈴ヲ捧持ス
御笠山上ニ光耀アリ
師實事由ヲ院ニ奏ス
仗議ヲ行フ

重臣、不免明時之憲章、然則神威既同、罪科何異矣、况乎社頭頻鳴、山谷屢響、神異萬數、異怪千變、加之三面僧房閉鎖、仰之窓、東西佛堂輟禮、誦之聲、悲哉、四百餘歲傳燈佛法、當於此時、將以淪廢焉、望請鴻恩、因准傍例、高階爲家處遠流罪、子孫家族被停其官者、將仰神威之不輕、彌加憲章之有由矣、誠惶誠恐謹言、連署

律宗十一人、學衆得業等、三會已講僧綱等、
廿六日、辛未、興福寺大衆數千人、引率七大寺等諸僧、參上洛陽、依春日神民之愁也、
廿七日、壬申、勅近江守高階爲家解却見任、配土佐國、並息男同爲遠停阿波守任、是由山科寺之大衆訴也、後日爲遠復任阿波守、○廿七日ハ廿八日ノ誤ナルベシ、

〔百練抄〕

五

堀河院 五月十四日、春日山震動、

八月廿六日、興福寺大衆奉春日神民、集會勸學院、捧鋒神木、隨身鏡鈴、神人所持之鏡於案上放光耀、自然鳴動、本宮御笠山上、同時有光耀云々、是依訴申近江守爲家朝臣、陵礫神民事也、是日左大臣（俊成）內大臣（師通）已下殿上人諸大夫等多參關白殿下、被申事之由於院、

廿七日、內大臣已下參著仗座、被定近江守高階爲家朝臣罪名事、依春日神民

寬治七年八月二十六日

九八七

訴申事歟、
廿八日、内大臣已下參入、被行爲家朝臣罪名事、除名配流土佐國、又緣坐輩或
解却見任、或贖銅、大衆等蒙裁許歸去、

大衆歸去
三笠山光
耀ヲ放ツ

十月廿八日、御笠山上有光耀、放其光五々度、

〔後二條師通記〕

八月六日、辛亥、天晴、召左相撲人五六人許、給菰酒饗饌事、依

〔御寺大衆亂發〕

與福寺大衆騷動延引、○相撲ノコト、七月

〔御寺大衆騷動延引〕

○相撲ノコト、七月

〔御寺大衆騷動延引〕

○相撲ノコト、七月

〔御寺大衆騷動延引〕

○相撲ノコト、七月

〔御寺大衆騷動延引〕

○相撲ノコト、七月

〔御寺大衆騷動延引〕

○相撲ノコト、七月

〔御寺大衆騷動延引〕

○相撲ノコト、七月

〔御寺大衆騷動延引〕

○相撲ノコト、七月

〔御寺大衆騷動延引〕

○相撲ノコト、七月

〔御寺大衆騷動延引〕

○相撲ノコト、七月

〔御寺大衆騷動延引〕

○相撲ノコト、七月

〔御寺大衆騷動延引〕

○相撲ノコト、七月

〔御寺大衆騷動延引〕

○相撲ノコト、七月

〔御寺大衆騷動延引〕

○相撲ノコト、七月

〔御寺大衆騷動延引〕

○相撲ノコト、七月

春日社ニ
莊園ヲ寄
スルノ可
否ヲ議ス

濟尋隆禪
等ノ房舎
ヲ毀ツ

執筆

陣定ヲ行
フ

無之、但奉寄之條、依社司申所聞食也、其旨可定申也、子細見於定文、次第申
上了、頃之左府稱所勞之由、被退出云々、調度文書付問日記所寄也、被仰下
之處、庄起否事所書也、載二箇條云々、令書了、執筆左大辨披見之處、
一紙申文事不書載云々、民部卿申云、未得心之、件申文得心事也、問左大辨
之處、被決實否、其後可有左右也、左大辨所申也、○下略、字佐八幡宮證人ノ
ノ條ニ
收ム、

十一日、丙辰、天陰、○中頭辨來傳殿仰云、春日社庄事、任調度文書可被定申、諸
卿參否可被申也、召外記雅仲來、廿三日陣定可候之由、所被仰下也、左右大臣
許參向、可告申其旨、返事明日午時以前可申也、

十三日、戊午、九坎、終日甚雨、隨身文書等參内、立中門邊間、於小板邊、殿下以御
扇招被召之、即參進、陣作法所被示仰也、參右仗座、民部卿右大辨左大辨被候、
令置膝突、召大外記定俊真人、問諸卿參否、藤中納言、二位中將稱所勞由、不參
仕、左大臣坐大炊殿、仰傳六位外記、告參入由、此間召文書、隨身府生獻之、頃之
右大臣參之、

十六日、辛酉、凶會、陰、時々雨降、頭辨來、○中殿下雖固御物忌、戶部、治部卿、右大
寬治七年八月二十六日

辨、左大辨被候、興福寺被問云、一々召問之、

廿日、乙丑、復、天陰、○中來廿二日奈良大衆等可參入由、有其聞云々、

廿三日、戊辰、沒、早旦雨降、戶部、頭辨等候殿御前云々、

廿四日、己巳、雨降、頭辨往反、

廿五日、庚子、九坎、早旦雨脚宜、已刻天晴、延真律師、永緣、賴嚴等、頭辨候御前、明

日大衆等、京上之由、所聞食也、參內、興福寺相待裁報、有由緒者可參上也、戊刻

威儀師憲命爲使來、大衆申云、第四寶殿昇奉御輿、可入奉京都、藤氏人々御向

爾、申可參之由、以此旨、令申殿下之處、兼遠朝臣歸著、御輿荒涼事歟、承了、

廿六日、辛未、復、天晴、著上座、一人令申案內、大衆申云、令申訴訟未仰裁報、日數

漸過、御向令參行歟、以惟信、以大衆意趣申殿下之、御返事云、御社事更以疎略

不待、可迎參之條、自往古至于今無其聞云々、件事御輿事何損在乎、興福寺大

衆京上之由、世間之人驚耳、酉刻向勸學院云々、

裏、大衆申云、相待裁報之歷數日、爲蒙宣旨所京上候也、左大臣、戶部、權大納

言、右衛門督、忠實中納言中將、右大辨、左大辨等被候、

延真律師歸參申云、或自道路各以分散、殘人爲承裁報、所參候也、

興福寺大衆入洛ノ報聞ユ

大衆藤氏公卿ノ神與ヲ迎ヘザルヲ責

陣定ヲ行

院宣ニ依リテ議ヲ延引ス

官掌ノ罪贖銅ニ當

〔未書〕南京大衆事
廿七日、壬申、天晴、上達部被參、興福寺大衆於勸學院訴申云、懈打之上、神人等

打凌莫過於斯、先是陣定可被行之如何、人々申云、先□被申旨同前云、晚頭隨

申請所被行也、爲家朝臣已及配給、〔流カ〕爲章奉免云々、爲遠不奉免者、予秉燭參內、

戶部、右大辨被候陣者、相待宣旨、已及子刻、依爲良久、內々令相尋之處、今夜延

引、依有院宣被延云々、聞鐘聲云々、歸參高陽院之間、已及鷄鳴、

廿八日、癸酉、陰、午刻頭辨來云、可令催所司之由、傳所被仰下也、召外記并史、去

夜可催設所司之由、仰下云々、酉刻參內、已及著右仗座、令置膝突、立三几帳燈

火、頃之頭辨來云、被問法家之子細、爲令申殿所參也、良久此間召大外記、問參

議少納言參否、申候由、右少辨官符案等問之、申候由、此間頭辨歸來云、調度文

書等被下之、宣旨仰云、土佐爲家□□類等可令遠流、左官掌罪過等問法家之

處、當贖銅、位記可退之由仰了、其次仰云、○中且成宣旨可逗留歟、戶部左大辨

等可定申也、左大辨申云、可候宣旨之由申候云々、戶部同之云々、頭辨起了、召

右少辨有信、被下文書等云、可配流之由仰了、官掌當贖銅歟、任國任申旨可被

行也、阿波守爲遠停任仰大外記、官掌仰辨了、

使著文四枚覽之、入筥、史奉之、披見了返給、畢覽官符了、外記義資入筥奉之、次

配流者ヲ
檢非違使
ニ付セシム

寬治七年八月二十六日

九九二

召大外記定俊真人、結政爲行請印、左大辨仰可參之由了、承了、左大辨申云、申參入之由起座、次召左少辨、可配流之人可著檢非違使等、可傳仰、予退出、亥刻也、雨脚宜歸參之後、雨脚密下之、

(頭書) 戶部被申旨名例律文可載官符、(御名) 內々先例令相尋之、無先例云々、仍不載云々、

九月三日、丁丑、天晴、(中略) 河原邊大衆等切損之由、有其聞云々、
八日、壬午、(九坎) 天晴、有信來云、配流人未罷之由、府使次第申上、付奏者時範令申事由、

欠日ハ萬
事ヲ忌マ
ズ

〔元亨三年具注曆裏書〕(五也) 寬治七年八月十一日、頭辨殿下示送曰、來十三日欠日也、可有陳定哉、道定申不可忌由如何、返事曰、爲急事者、不可被忌、於欠日者、本可忌種蒔益屋也、忌於萬事者、近代之凡俗云々、

〔本朝世紀〕 康和五年十二月廿日、乙丑、正四位下行木工頭兼丹波守高階朝臣爲章卒、爲章者、(中略) 七年八月廿八日、親父近江守爲家朝臣坐凌轢春日神民事、除名配流、爲章依爲長男、可有緣坐、然而依臨時之恩不坐、四男阿波守爲遠一人停見任、非常斷專、人主之義也、

爲遠一人
ヲ停任ス

坎日ニ公
事ヲ行フ

〔山槐記〕 元曆元年八月卅日、丙戌、陰晴不定、(中略)

沒滅凶會坎日被行公事例、

寬治七年八月十二日、(三之) 戊午、坎日、左大臣、內大臣以下參陣、被定申春日神人訴申一護庄爲近江國司被滅亡事也、

〔拾芥抄〕(下末) 忌日人出仕例

寬治七年八月日陣定、民部卿、左兵衛督參陣、依召也、仰云、神事猶有例、況仗議哉、或有勤神社祭例、又右少辨有信、依召參殿下云々、

〔春日神主祐賢記〕(和) 大 一神木御入洛等事

神木勸學
院ニ入ル
目代在廳
ヲ配流ス
神木歸坐
ス

(堀河院御代長者宇治殿御時) 寬治七年八月廿六日、著御勸學院、當院者閑院贈太政大臣爲輔佐、王室被建立畢、若氏寺有訴訟之時、奉移御神於氏院、可驚天聽云々、依御入洛、(余力) 近江守爲家朝臣配流、(土佐) 子息二人停任、延行、(日代) 常爲兼、(在職) 佐所從二人、(國越) 前使部、(伊豫) 同廿八日御歸座、

〔大宮文書〕(下) 大和 當社御遷坐御進發御入洛之代々日記 □ □ □

(堀河院長者京極殿廿六日勸學院寺務賴尊法印) 寬治七年八月三日御入洛、同廿八日未刻、御歸坐、

〔興福寺略年代記〕(西) 寬治七年 八月廿六日大明神御入洛、著御勸學院、訴

寬治七年八月二十六日

九九三

近江守爲家流罪之由、廿八日蒙裁許退歸、
〔十三代要略〕堀河八月廿六日、春日神人山階大衆等集會於勸學院、訴申爲家朝臣可配流之由、
廿八日、配爲家於土佐國、

○東寺王代記、一代要記、興福寺年代記異事ナキヲ以テ略ス、前阿波守高階爲遠ヲ復任シ、橋俊綱ヲ近江守ニ補スルコト、十月十八日ノ條ニ、爲家ヲ召還スルコト、嘉保元年六月五日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

尊卑分脈高階氏

成章大宰大貳、正三、號欲大貳、後拾作者、

爲家備中守、正四下、

爲章丹波守、正四下、

爲遠伯耆守、正四下、

高階爲家

九月大 亥 朔 盡

四日、寅皇后馨子内親王、崩ジ給フ、

〔扶桑略記〕三十一、今上皇帝、諱七、善仁、代九月四日、寅皇后宮崩、年六十二、後一條

天皇二女、後三條院后也、

〔後二條師通記〕〔系傳〕「皇后宮薨給」九月四日、寅天晴、皇后宮薨云々、

五日、己卯、天晴、左大辨爲仙院御使、參殿下、皇后宮令薨給、

〔中右記〕十月廿日、甲子、天晴、會ノコトニカ、ル今日故皇后宮御法事被修云々、大乘會後僧侶參入、

〔兵範記〕嘉應元年十二月十五日、丙申、略

上皇御輕服時被行吉事并准據例

寛治七年九月五日、己亥、皇后馨子内親王薨、後三條院后、白河

〔勸仲記〕正應五年九月九日、丁卯、略

傍親有故時例幣平座間事

堀川院

寛治七年九月四日、西院皇后宮馨子崩、帝繼母、

寛治七年九月四日

御法事

西院皇后
ト稱シ奉ル

大祓
遺令奏
廢朝五日

九日、無重陽平座、依皇后崩給事也、
十一日、例幣延引、依同事也、於八省有大祓、
今日被奉遺令、今日廢朝五ヶ日有警固等事、

〔歴代編年集成〕

堀川院 皇后馨子 寛治七年九月四日崩、六十五、

〔日本紀略〕

後一條院 長元二年二月二日、辛酉、丑刻中宮御産女子、於權中納言

兼隆卿大炊御門東洞院家、有此事、

四年十月廿九日、癸卯、第二馨子内親王著袴、即授二品、

十二月十六日、己未、卜定賀茂齋王、第二馨子内親王卜食、去十三日遷座丹波

守章任三條宅、又勅賜本封外、千戶、任人、賜爵、准三后、

五年四月廿五日、乙丑、賀茂齋王禊東河、入大膳職、

六年四月九日、甲辰、賀茂齋王禊于東河、入紫野院、

九年四月十七日、乙丑、戊刻天皇落飭、崩于清凉殿、中賀茂齋院 出本家、坐近

隣人宅、

〔歴代編年集成〕

後三條院 中宮藤馨子内親王 後一條院第二皇女、永承

六年十一月八日入東宮、延久元年七月二日立后、四十一、

齋院御退

御著袴
齋院
准三后

東宮妃

中宮職
皇后
御落飾

〔一代要記〕

皇后馨子内親王 母皇后藤威子、前太政大臣道長四女、長元四

年十三年□月十三年□日爲齋院、准三宮、同九年四月十七日退齋院、永承六年十一月

八日入春宮、二十三日、延久元年七月三日、丁卯、爲皇后、號中宮職、號西院、皇后宮、

上四以承保元年六月二十二日爲皇后、延久五年四月二十一日落飾爲尼、後宮

如元、寛治七年九月四日崩、年六十五、

〔扶桑略記〕

白河天皇 延久五年四月二十一日、甲午、太上皇由御惱重、出家

入道、同日中宮落飾爲尼、

〔今鏡〕

四ふちなみの上 入道おとゝの第四の御むすめ、後一條院の中

宮威子と申しき、略中この後のうみたてまつりたまへる姫宮章子内親王

と申し、二條院と申すこの御事なり、略中馨子の内親王と申すも、又同じ御

はらにおはします、長元四年に賀茂のいつきにて、同九年長元九年四月

に出でさせたまひて、永承六年十一月永承六年十一月、後三條の院東宮に

おはしました、女御にまいらせたまひき、御とし廿三、承保元年六月廿二日

皇后宮にたち給ふ、延久五年四月廿一日、御くしおろさせ給ひき、院の御く

しおろさせ給ひし、同じ日、やかて同じやうにならせ給ひし、いごあはれに

東宮女御

御剃髮ノ
後后位舊
ノ如シ

御世系

〔本朝皇胤紹運録〕

後一條院

馨子内親王 齋院、後三條后、寛治七九四崩、六十、中宮威子、道長公女、母同

〔本朝皇胤紹運録〕

田本

後一條院

馨子内親王 齋院、皇后、後三條后、號西院皇后、母同

〔皇親系〕

四

後三條院天皇

皇女 母馨子内親王、後一條院、皇女、天、永承七年正月生、六月四日天

皇子 母馨子内親王、後一條院、皇子、天、康平五年九月五日生、即日天

〔榮華物語〕

後

させ給ひにしかば、あさましきことを思し歎かせ給ふ、春宮の齋院は、男宮女宮産み奉らせ給ひしかと、皆うせ

〔勅撰作者部類〕

女部

西院皇后宮 馨子内親王、齋院、後三條后、後一條院皇女、續古今集、戀四、

續後拾遺集、雜中、

皇子女

御和歌

御容姿

馨子内親
王ト章子
内親王

中宮威子
馨子内親
王ヲ寵シ
給フ

藤壺西面
トシ御所
給フ

中宮職員
奉仕ス

〔榮華物語〕

殿上

中宮

には、女宮二人おはしまして、男宮のおはしまさぬ

ことを口惜しう、内にも宮にも殿はらもおほしめす、中二の宮又いさう

つくしうて、さしすかひておはします、中宮はもてかしつき聞えさせ給ひなからも、心

ゆかすくちおしう思ひきこえさせ給て、心とけすおほしめしたり、内のう

へは、一品宮をかきりなきものに思ひ聞えさせ給へり、宮は二の宮をすさ

ました、人の思ひ申したりしも、心苦しくて、人しれすゆつるかたなくて、哀

と思ひきこえさせ給へり、かく御心少しつゝはかたわかせ給へれど、上も

宮もおごらす、いづれもいごかなしうしたてまつらせ給ふ、藤つほの東お

もては一品宮西おもては二の宮の御方にしつらはせ給ふに、一品宮の御

かたには、殿上人さなから御しつらひしさわく、二の宮の御かたには、后宮

の宮つかささなからさふらひ、しつらひさまゝにおかしくなんみえけ

る、殿上人を、うへは一品宮姫宮の御方にわかたせ給ふ、内には女房を、宮わ

かたせ給ふ、心々に一品宮にまいらんなど、おほかたにもてたかはす申す

人々ありけり、齋院は村上の十宮居させ給ひて、年久しくならせ給ひぬる

寛治七年九月四日

一〇〇〇

御髮美ハ
シ御父天皇
ヲ慕ハセ
ラル

か、おりゐさせ給ひぬれば、(皇子)二の宮居させ給ふへしと、御門后思しめしなげ
かせ給ふとかきりなし、今年を三つにならせ給ひける、御くしほとよりも
長くおはしましけり、定らせ給ひなは、えそかせ給ふましければ、そき奉ら
せ給ふ、御くしいと長く美しうおはします、御心いとなつかしうて、内をも
したひ奉らせ給へは、いとあはれに思ひつき聞え給へり、この事を歎き思
しめすことかきりなし、略○中齋院に遂に(皇子)姫宮さまらせ給ひぬれば、御門
后思しさわかせ給ふことかきりなし、略○中齋院は又なつかしうをかしけ
に、らうたけににほやかに、なてしこの花を見る心ちそせさせ給へる、みま
さかの三位など、またよき人あまた見奉れど、この御前達のやうなるはお
はしまささりき、一條院の女(皇子)二宮、故女院(皇子)におはしまししかは、見たてまつ
りし、それそいどをかしけにおはしまししかども、この二所(皇子)の御やうには
えおはしまさすなど、けちえんにほめ申し給ふさま、ほりかにあいきや
うつき給へり、

〔榮華物語〕

(後一條院) 御服はて、(皇子)一品宮齋院の御くし剃かせ給ふ、(後一條院)殿を剃き
奉らせ給ふ、略○中齋院のいとこめかしく、らうたけにうつくしうおはしま

御容姿

御後見

御母中宮
ヨリ小相
條殿ヲ相
傳シ給フ
上東門院
ニ瓜ヲ上
ル

皇后ト後
三條天皇

すを、様々にありかたく見奉らせ給ふ、略○中一品宮齋院に露の御事もおは
しませは、上達部殿上人いみしうまゐり、(後一條院)殿内の大殿よりはしめ奉りて参
らせ給へは、めてたうおはします、御門の御なこりは、かくこそおはしまし
けれこそ、人申ける、

〔榮華物語〕

(皇子) 東宮の齋院たたならすならせ給ひぬ、いかかと思し召
して、御祈などせさせ給ふ、この院の御後見は、(皇子)源大納言昔のまゝに仕う奉
らせ給ふ、

〔榮華物語〕

(長曆三年) 六月廿七日、内やけぬ、略○中前の齋院は、(皇子)故宮の御處分な
る小二條殿造り改めて渡らせ給ひにき、

〔續後拾遺和歌集〕

(十六) 上東門院、日頃おなしところにおましまして、
るか、外へうつらせ給ひけるに、うりを奉らせ給ひけるとて、

西院皇后宮

思へ共猶つらき哉、瓜生山いかにせよどかけふはなるらむ

〔後拾遺和歌集〕

(十六) 皇后宮みこの宮の女御と聞えける時、里へまかり
出てたまうにければ、そのつとめてさかぬ菊にさして、御消息ありけ

寛治七年九月四日

一〇〇一

寛治七年九月九日

一〇〇二

皇后ト經
信

るに、

後三條院御製
にけん

またさかぬまかきの菊もある物をいかなる宿に移るひぬらむ

〔續古今和歌集〕春歌下

西院皇后宮土御門右大臣の家におはしましけ

る時、三月櫻のさかりに、上達部殿上人参りてあそひけるに、かはらけ

ごりて、

大納言經信

庭の上に吹まふ風のなかりせはちりつむ花を空にみましや

○十三代要略、歷代皇紀、賀茂齋院記異事ナキヲ以テ略ス、

九日、未、癸重陽宴、平座ヲ停ム、

〔柳原家記録〕

五十六

平座小除目部類

平座次第

依皇后家非常平座被停止例

玄記云、寛治七年九月九日月夜皇后宮非常、不知何病、同今日平座停止云々、時

範朝臣所行也、威子皇后時例云々、可尋之、

〔勘仲記〕

正應五年九月九日、丁卯、略

傍親有故時例幣平座間事

堀川院

皇后ノ崩
御ニ依ル

寛治七年九月四日、西院皇后宮馨子崩、帝繼

九日、無重陽平座、依皇后崩給事也、

十一日、乙伊勢例幣ヲ延引ス、

〔後二條師通記〕

九月八日、壬午

天晴、有信來云、略

○中例幣延否所被沙汰

也、

長元九年
ノ例

〔未書〕例幣延引

十日、甲申、天晴、昨日例幣延引、長元九年之例也、有神今食例歟、五位藏人時範

内々殿下所被仰也、可仰左大臣也、

〔勘仲記〕

正應五年九月九日、丁卯、略

傍親有故時例幣平座間事

堀川院

寛治七年九月四日、西院皇后宮馨子崩、帝繼

十一日、例幣延引、依同事也、

〔伊勢公卿勅使雜例〕

九月例幣

寛治七年九月、例幣延引、

○伊勢例幣ヲ追行スルコト、十月八日ノ條ニ見ユ、

法性寺座主僧正仁覺ヲ天台座主ニ補ス、

寛治七年九月十一日

一〇〇三

良眞辭書
返付ヲ
求ム

師通仁覺
ノ新補ヲ
賀ス
仁覺所々
ニ慶ヲ申
ス

上皇御馬
ヲ賜フ

〔後一條師通記〕九月五日己卯天晴左大辨爲仙院御使參殿下、○其次示
〔未書〕前座主申返辭書云々
左大辨被仰云天台座主之間所被仰也未下以前可被仰也辭書之條前座主
内々送給と令申之不得其心云々、
〔未書〕被補天台座主
十一日乙酉天晴雨降天台座主僧正仁覺補之勅使少納言惟信也、
〔未書〕新座主許示送慶事
十四日戊子復天晴○中天台座主許令四位侍從宗信申慶賀者也戊刻地震

〔中右記〕十月十四日戊午天晴今日新座主被申慶賀於所々一家之公卿其
員濟々出立處左府土御門亭東對也座主被參内左中將國信朝臣奏事由召
二間給祿云々國信朝臣取之

〔元亨二年具注曆裏書〕寬治七年十月十四日〔日號〕戊午法印仁覺律師俊元著座云
々、

座主慶賀、
自院所給之移馬六疋自殿下所遣之移馬四疋引之次御前等自西方騎馬來
渡大略御前六十人許之中三會已講二人明胤阿闍梨十六人非職所司十人
延曆寺、
法成寺、
其有職者赤色袍奴袴非職者鈍色衣奴袴或著浮線綾鳥眼織物唐衣等非

夜御帳ニ
御ス

隆覺ヲ律
師ニ任ズ

勅使登山

法過差、只有其中或用深〔深カ〕色笠或純風流笠皆用父祖被知人々輩其所司者
皆束帶以上皆著笠藺沓不著袈裟上衣等次第出自東門次座主於東門乘
車大納言右兵衛督等被送殿上人或一族□中童子六人中大童子四人略
之先可參殿下次可參内裏次可參院云々、
殿下〔拜賀カ〕□□
内裏源中將國信於北陣申繼召於御前、二間敷圓座爲座主座主退出之次給
祿、紅掛院、織物掛、上御夜御帳中開戶御

〔僧綱補任〕○五興福寺本

僧正仁覺 九月十一日任天台座主、
律師隆覺 九月十一日任權僧正隆明讓也依之被申可補山座主由□□山
大衆訴爲慰其憤以弟子被補律師大膳大夫藤家範子、
〔未書〕

〔華頂要略〕天台座主記二 第卅七僧正仁覺〔乘〕 治山九年右大臣源
男、母寬仁入道太相國女字治禪定大閤爲子師主慶範 寬治七年癸酉九月
十一日任座主、〔年四〕

勅使少納言藤原惟信同十二日登山、

寬治七年九月十一日

寛治七年九月十五日

一〇〇六

同廿日、於無動寺南山房請印鑑、

〔門葉記補〕

〇八十一山城

雜決六

法性寺座主與日吉別當兼帶例事

印鑑ヲ請
ク法性寺座
主日吉社
別當ヲ辭
ス

一乘房座主仁覺

寛治七年九月十一日避職、即此日補天台座主

〔扶桑略記〕

〇三十三上皇帝仁十四代

九月十二日、丙戌、僧正仁覺補天台座主、依

大僧正良眞辭退也、

〔歷代編年集成〕

〇十九堀河院

天台座主大僧正仁覺 土御門右大臣師房公息、

一身阿闍梨慶範僧正弟子、寛治七年九月十日補、

〇愚管抄、歷代皇紀裏書異事ナキヲ以テ略ス、仁覺ヲ天台座主ニ補ス

ル日ヲ扶桑略記ハ十二日、歷代編年集成ハ十日ニ作ル、今、後二條師通

記、僧綱補任等ニ據ル、天台座主良眞ノ上表スルコト、八月二十日ノ條

ニ、法印仁源ヲ法性寺座主ニ補スルコト、十二月二十九日ノ條ニ見ユ、

十五日、己月蝕、

〔後二條師通記〕

九月十五日、己丑、復、月陰、未刻以僧六口令轉讀心經万卷、三

口僧、北方料也、僧饌如常、伴蝕不正見云々、慎否之條、見於能算今年勘文、

月蝕

正現セズ

十七日、卯辛、陸奥守藤原基家卒ス、

〔後二條師通記〕

九月十七日、辛卯、天晴、雨降、〇中陸奥守基家卒去、顯仲還

留罷登之條、如只今者無及術由、自母許所申也、殿下申下御教書、相副舍人二

人可遣者也、必可不擇日次之由、左大辨所令申也、來廿三日可遣者也、

十九日、癸巳、凶會、天晴、陸奥在廳官人許□文等所遣之例云々、

〔尊卑分脈〕

〇藤氏 北家

兼經

正三位、參議、母左大臣雅信卿女、

基家

正三位、左中將、陸奥守、母帥隆家卿女、寛治七々々於任國卒、

顯仲

左兵衛、從五上、實資仲三男、

實保

從五下、左馬權頭、保安元九出家、

〇基家ヲ陸奥守ニ任ズルコト、寛治二年正月二十五日ノ條ニ、源義綱

ヲ陸奥守ニ任ズルコト、本年十月十八日ノ條ニ見ユ、

二十日、甲午、金峯山寶殿燒亡ス、尋テ、實檢使ヲ發遣ス、

〔扶桑略記〕

〇三十三上皇帝仁十四代

九月廿日、甲午、金峯山金剛藏王御殿燒亡、

但御体不燒云々、

寛治七年九月十七日 二十日

一〇〇七

本尊燒失
ヲ免ガレ

興福寺衆徒亂參
徒金峯山
洛從ハ
ルニ忿

衆徒四十餘人

南北大衆淫亂極マリナシ

金峯山ノ燒失ヲ公トナス

〔百練抄〕

堀川院 九月廿日、金峯山寶殿燒亡、

〔後二條師通記〕

九月十四日、戊子、復、天晴、興福寺大衆等申云、去月之比不奉

仕參、洛云々、依件事、可向金峯山野際之由、所言上也、每道路令固護、主間、已及合戰、彌以大衆忿怒云々、

廿二日、丙申、凶會、天晴、金峯山 聞云々、天下大事也、荒大衆等四十餘人許入籠御山、伴僧共所爲歟、荒涼說也、實否之條未聞云々、

廿四日、戊戌、凶會、晴、戊刻金峯山寶殿燒失之由、自高算許所言上也、世間大事也、失火放火之條未知云々、

廿五日、己亥、復、天晴、白地向二條宅、殿下仰云、南北大衆淫亂罔極、前太政大臣申云、九月九日以後僧侶往反、被相尋、可有左右歟、世間大事也、

廿八日、壬寅、九坎、天晴、金峯山 放火之條、未尋實否云々、已及公家沙汰、於今者不可有沙汰者、

廿九日、癸卯、狼藉、雨降、日脚不見、朝間歸二條亭、金山寺解狀等令惟信下給、此間事等可申子細也、答云、世間大事也、相尋實否、可左右候、

十月二日、丙午、早旦、天陰雨降、 金峯山少史政孝官掌等爲實點所遣也、

關白師實
濟尋ヲ興
福寺ニ遣
スハサント

〔石清水文書〕 宮寺緣事抄末二 七年癸酉九月廿日、甲午、金峯山金剛藏王

御殿燒亡、但御躰不燒云々、 九年癸丑、代、天晴、 次參高陽院、 權別當濟尋可向興福寺之由、問尋

大衆許、所被仰之處、最以道理也、荒大衆未承伏云々、但可罷向所被仰也、永緣、

〔元亨三年具注曆裏書〕 寛治七年九月廿七日、前中務少輔語云、 侍從大納言於御所被申云、延喜十二年彼山燒亡、寺并像皆以燒失、聖寶僧正

造立由有御記、在明覺法眼許云々、 〇歷代編年集成、一代要記、十三代要略、皇代曆異事ナキヲ以テ略ス、興

福寺衆徒、入京ノコト、八月二十六日ノ條ニ、金峯山ノ燒失ヲ議スルコト、十月十五日ノ條ニ、興福寺衆徒、金峯山ヲ襲フコト、十一月三日ノ條

ニ見ユ、 二十六日、 醍醐寺座主勝覺ヲシテ、孔雀經法ヲ大炊殿ニ修セシム、

寛治七年九月二十日 一〇〇九

寛治七年九月二十六日

一〇一〇

〔後二條師通記〕九月廿六日庚子天晴被修孔雀經法云々阿闍梨醍醐座主也

〔元亨三年具注曆裏書〕寛治七年九月廿七日前中務少輔語云、自昨日令修孔雀經法給於大炊殿被修之阿闍梨定照僧都也、

大日本史料 第三編之二終

昭和二年十二月一日印刷

(大日本史料第三編之二奥付)

昭和二年十二月三日發行

豫約價金七圓



編纂者 東京帝國大學

印刷者 四日市印刷株式會社

發行所 東京帝國大學文學部 史料編纂掛

(電話小石川 85) 四〇二番



東京帝國大學
東京市神田區
本郷三丁目

昭和十二年十二月廿一日發行

昭和十二年十二月廿一日發行

東京帝國大學

東京市神田區

東京帝國大學



